

平成27年(西暦2015年)1月

瞑想録(その4)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。その瞑想の主題は、東洋思想に基づく「連続体と蓋然論理」です。究極的には科学と対をなすと思っているものですが、科学周辺に位置するものの、科学そのものではありません。学問でもありません、再現性も絶対真も保証しないことを「売り」としているからです。また、瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明も含まれています。特に主題以外の部分には、現行の常識では「誤り」とされていることやタブーとされていることも含まれていますが、あくまでも主題を見て下さい。その上で言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。なお、「真理は深いほど簡潔であるべきだ」と言う立場からは、この論集における何十頁ものだらだら書きは、残念ながら私がまだ真理の核心に到達していないことを、如実に表しています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

2014. 12. 5

1、矛盾の深層



本日は叙述と矛盾が同時に発生するような表現について見てみます。叙述と矛盾が同時に発生する、これは従来の論理学では発生しえない、またあってはならないことなのですが、現実を見回したところ、すぐに20個も見つかりました。これはおそらく論理ではなく情理のレベルで矛盾により表現した、あるいは矛盾でないと表現できない

瞑想録(その4)

ような状況があるということなのでしょう。具体的にどういう状況なのか見てみましょう。

そもそも「矛盾」と言う言葉が「元祖矛盾」です。「絶対防げる盾(たて)と絶対に破れる矛(ほこ)の組み合わせ」ですから。これについては色々な解釈があります。例えば「確率半々でどっちかが勝つ」とか「矛は盾を半分破り、盾は矛を半分防ぐ」とかです。ただこれらの解釈はちょっと合理化しすぎていてつまらない気がします。「破れたと思ったら実は破れていない」と言う類の回答もありえます。この解釈は悟りに少し近くなりました。

「衝突して火花が散り爆発する」と言う類の回答もありえます。これは問題設定の枠に捕らわれていないという意味で、知恵が働いています。「異次元空間が現れる」と言う類の回答、これは矛盾の本質を突いているように思えます。「切り結ぶ刃の下こそ地獄なれ、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」、これは有名な歌ですが、「矛盾には身を捨ててみろ」と言う尊い教えとも読めます。色々想像を掻き立ててくれて、どの解釈も秀逸に思えます。

次の例として「天才バカボン」を挙げます。これは漫画の題名なので単に受け狙いとも見えますが、漫画の中のキャラが本当に「天才であり同時におバカである」わけです。つまり矛盾を体現して見せてくれています。これなんぞは、「天才と気違いは紙一重」と言う言葉もあるように、多神教世界特有の「逆一如」の真理の体現かもしれません。それにしても良い味があります。

続いて安全工学の例に行きます。安全工学は原発が典型ですが、「十分に安全であるが、でももし故障した時には」と言う論理を使います。「十分に安全なら故障する訳無いだろう」と理屈をこねたくなります。つまり問題の設定がそもそも矛盾なのです。しかし安全工学はそもそも欧米人が開発した学問ですから、この例は「一神教で理屈一辺倒の欧米人でも切羽詰まると馬脚を現す」の良い例のようです。で、この分野の専門家は一般に、この安全工学の矛盾の論理を分かりやすく、「層の厚い安全設計」とか「深みのある安全設計」などと表現しています。つまり、「矛盾とは即ち層の厚さや深さである」と言う解釈が成り立つ訳です。たしかに矛盾を受け入れるには懐の深い包容力が必要です。

次の例に「痛痒い」を挙げましょう。「甘辛い」もそうですが、痛いと痒いはむしろ反対語、甘いと痒いもむしろ反対語なところ、これらの言葉は「どっちでもありどっちでもな

瞑想録(その4)

い」と言った微妙な感じを出しています。単に中間なのではなく、「微妙に同時に両方」なのです。これもある意味「層の厚み」「含蓄」「多様性」がキーワードになりそうです。

例を続けましょう。「公然の秘密」、これはどうでしょうか。理屈を言うならば「公然である時点で秘密ではない」となりますが、理屈一辺倒では微妙なニュアンスが出ません。これは「秘密だと思っているのはバカな本人のみ」と言うからかいの気持ちや、「実は秘密を共有しているのだよね」と言う「特権的独占の気持ち良さ」を表現しています。つまり典型的に、理屈よりも感情の表現です。そう言う意味では「甘辛い」も多分に感情ですよ。矛盾は感情の妙の奥深さを体現しているとも言えます。

次に「有難迷惑」、これはどうでしょう。似た例に、「小さな親切大きな迷惑」と言うものもあります。もちろん同時に同じ行為に対して、ありがたくもあり迷惑でもある訳です。これも矛盾が微妙な感覚の奥深さを表している例と言って良いでしょう。物事を連続体で把握しないと、点のモデルではこの例に見る物事の多面さや多重さが正面から受け取れず単に誤謬に収束してしまいます。

続いて「ゆっくり急げ」、これはどうでしょう。島秀雄さんが言った、「技術開発は長足に進んで良い局面ときめ細かに注意する局面が混じっている」も、この言葉に類似しています。また、聖書からの引用ですが、「鳩のように大胆に蛇のように細心に」、これも矛盾の感じが「ゆっくり急げ」と似ています。いずれも「微妙な問題なので、幅広くかつ臨機応変かつ機敏に対応しなさい」と言う意味のことを表現しています。臨機応変の具体的な態様や適用の仕方については勘と経験と知恵で学ぶ、つまり悟るしかないですが。

例を続けます。「とっちゃん坊や」、これはどうでしょう。似たような言葉に「若年寄り」と言うものもあります。若いと年寄りが混じった、見かけに似合わず変に老成している、もしくは逆に見かけに似合わず幼稚な場合で、基本的にからかいの言葉です。この言葉も、現実のちぐはぐさはもちろんのこと、「笑える」「気持ち悪い」と言った微妙な感情の表現になっています。「微妙な感情」、これは矛盾表現の効用の一つのキーワードになりそうです。

次は画像系です(トップの画像)。「スリップ注意」の道路標識ですが、タイヤのスリップ痕が交差していて、これは現実と矛盾していますよね。でも敢えて矛盾を用いることによって、「スリップ注意」の警告がよりリアルになっています。人の感性はこのように出来ているのですね。デフォルメ画が「本物よりも本人らしい」と言われるのも、似た感

瞑想録(その4)

覚でしょうか。トリック画とかもありますね。こういう意味で矛盾こそは知恵の出し所、知恵を出せる余白であって、一種のファンタジーだと言えます。

最後に2つほど、単語より長い矛盾の例を見ます。まず、「猫好きにとっては、かわいい猫はもちろん、ブスな猫もかわいい」と言います。理由は、「かわいい猫はただかわいいが、ブスな猫は味があってかわいい」と言うことだそうです。これも微妙で層の厚い感情の表現ですね。次に、「怒ってなんかいないよ」と言いつつとげとげしく目がつりあがっている人の場合です。これは言葉だけでなく態度も含めた矛盾の例です。これも本心と建前の微妙なギャップを表しています。味があってある意味笑えます。似た例に「右目で泣いて左目で笑う」があります。二重人格を体の物理上ありえない動作で的確に表現しています。

以上を総合して、「矛盾表現は理屈よりも感情のためにあり、特に層の厚く深い微妙な感情を表現するための、他の手段には代えがたい表現法であり、しばしば悟りへの近道ですらある」と、どうやらまとめられそうです。ただ、矛盾を何でも組み合わせれば必ず意味のある新語ができると言う訳ではなく、やはりそこには表現に対応した微妙な感情が実態として無ければならない、さもないとそもそも理解できないということです。「矛盾が理解できる」と言う事態が決して尋常でなくむしろ希な驚くべきことであることには留意して下さい。例えば何気なく「男のおばさん」と言われても、およそその意味するところが分かりません。言い間違いだと思うでしょう。

なお、矛盾の表現にはほかにも、「無用の用」「ギンギラギンにさりげなく」「慇懃無礼」「プロ市民」「かわいがりいじめ」「仕事のための仕事」「問題のための問題」等まだ色々あります。また、「連続体上ではどのような構造によって矛盾表現が成り立ち得るのか」と言う根本的問題もあります。これらについては追って見て行きます。

2、意味を理解する(その1)

今まで「意味理解」と言う点について、主として蓋然論理と連続体との関係から、特に矛盾と言う際立った対象に注目して色々見てきましたが、この辺でもっと考察範囲を広げて、一般的な状況における意味理解を見て行きたいと思います。例として最近のツイッターに見られたつぶやきからいくつか拾いました。ただこの観点は範囲が広くて1回の記事で見極められると言うものではなく、今日はまず総論的な手探りから始めます。

1、標準語でなくても意味が理解できてしまう例

瞑想録(その4)

「ゆうこリン、もうダメポ」と言う表現を誰かがツイッターでつぶやいていました。小淵優子氏の辞任直前です。「ぽ」と言う終了を示す助詞は、標準語はもとよりスラング辞典にも無いほどの言わば1回限りの表現だと思うのですが、我々はこれを、「優子さんはもうダメだ」の意味だと理解できます。ちなみに「ぽ」の代わりに「か」だと別の意味になってしまいますが、「ど」だったら同じように分かるでしょう。

これはどういうことかと言うと、「ぽ」や「ど」は現状意味の空白域になっていて、かつ意味的には標準助詞の「だ」に日本人の通常の意識上「近い」(連続体の周辺に何とか引っかかっている)ために、言わば応用動作で拡張理解できてしまうと言うことです。併せて「ぽ」には主としてその響きから、おどけている、あるいはからかっている雰囲気も出てきます。面白いですね。

2、似ていると認識する例

人の能力が際立っているところは、「似ているものを同一として括れる」と言う点にあります。「モズの早贄(はやにえ)」と言う言葉がありますがこれは、モズは木が成長して枝や葉振りが少し変わってしまうと、もはや状況が同じだとは理解できずに、せっかく自分が前に枝に刺した餌を見落としてしまうと言うことです。この例からも人の柔軟な能力とその重要性が理解できます。似ていることを同一と括れるので、根本原因を見極めたり、抜けている論理連鎖を見破ったり、定石を考案したり、医療行為ができたりする訳です。

人は同時に、よく間違えたり勘違いしたりしますが、これも「類似」に起因しています。何らかの意味で似ていると認識するが故の早とちりです。ただし、事物には常に無限個の側面があるため、似ているという認識も、その全部が似ているのではなく、あくまでも「特定の一面が似ている」と言う意味です。だから「似ている」にも色んな似方があります。

私は子どもの頃、盲導犬のことを「どう猛犬」なのかと思っていた。また、万国博覧会の「ばんこく」はタイの首都のバンコクで開催するイベントかと思っていました。どうしてタイでばっかり大きな博覧会をやるのか疑問ではありましたが。最近でも「バンクーバーオリンピック」が「ハンバーガーオリンピック」に見えたことがありました。まあこれらの間違いは、「音が似ている」あるいは「形が似ている」と言うだけの外形的な、ダジャレに近い、これ以上の発展の役に立たないと言う意味では程度の低い類似ですが。

もっとシュールな類似としては、「今や教師に一番近い職業は刑務所の看守だ。それにしても多勢に無勢で、最近教師側が負けたりする。これこそマルクスの予言した共産主義革命と同じ構図だ」と言う言明があります。ちょっとブラックユーモアの気がありますが、比較対象の特定の一面と社会事情を良く切り出しています。別の例だと、福島第一原発の吉田所長の写真を見て、病院の無菌室での写真だと思っていた

瞑想録(その4)

人が居ました。本当は原発の防護服でしたが、まあ宇宙服も含めて、形態的にも機能の上でも確かに似ています。

3、常識に基づく推測例

常識的な判断の例を挙げましょう。あるクラブで部長と副部長が同時に辞めたとします。この時人々は「おそらく内輪もめでもあったのだろう」と判断します。また、駅のホームの安い立ち食いそば屋に「撮影禁止」の張り紙があったとします。この時人は「きっと客同士のトラブルでもあったのだろう」と判断します。絶対とは言いませんが大抵当たりますし、気付きに経験や場数とそれなりの知恵が要ります。

このように人は、類否判断や正否判断をするのに論理よりも、人としての素朴な感情やそれまでの人生で得た体験や蓋然法則を鏡として行っています。例えば私たちは、「普通は〇〇だろう」「常識的には〇〇だ」「〇〇とは考えにくい」「〇〇ってウソっぽい」等、こう言った思考形式で日々の物事を判断しています。典型的な蓋然論理です。ちなみに経験のない赤ん坊は、本能はあっても、個々の社会事象に的確で微細に入った判断は下せません。ですから学校等での教育も、後天的常識を手っ取り早く獲得するための促成手段であるとも考えられます。

人は蓋然判断の結果として、通常は穏当な推測をしますが、時に間違いもします。推測が当たらない例を挙げましょう。アニメの「タイガー & バニー」ですが私は、「美人のバニーガールの前に酔っ払ったトラおじさんが出てきて、色っぽくからみつく話」なのかと思っていました。実際はまるで違って硬派のアクション物で、ネーミングからの推測は当たりませんでした。オジサン特有の変な常識がバイアスになったのかもしれない。ただしその「間違い」が時として、従来の常識の側にある場合もあります。こう言った時に、「素朴な疑問」が実は新たな発見や社会システムの進歩大化けする訳です。

4、モチーフと言う常識の例

例えば「仮面ライダー」とか「大河ドラマ」とかの、お笑いでないシリアス系のドラマで、ヒーローが悪とともに戦っている最中で突然全員が阿波踊りなどを始めて辞めずにそのまま最終回を迎えたら、大抵の視聴者はついていけなくて、シナリオライターのまじめさと正気さを疑うでしょう。シナリオ全体を通したモチーフが見えないからです。

このように物事の進行には常に、論理学ほど硬直はないものの蓋然的な無言の常識や約束事、あるいは常識の制約があり、だからこそ理解できるわけです。このモチーフは理解にとって決定的です。モチーフを壊さずにいかにちょっとした変化を入れるかが、ドラマや小説や絵画はもちろん、およそあらゆる芸術や仕事に至るまで、世の中すべてに於ける不可侵な掟なのです。

瞑想録(その4)

ただしこの常識の掟は不変なものではなく、時代時代の積み重ねが新たな経験となることにより、常識自体も変化していきます。こうやって世の中は進歩していく訳です。そして逆に、進歩に至らないあるいは退歩すら強要するような事物や経験は、「下らない」「無意味」あるいは「反社会的」として却下されることになります。これがマクロな歴史の非可逆的な進行の実態です。

(続く)

3、働き方それぞれ

日本はベーシックインカム制を取っていないので、基本的に全員が働く義務を負っているが、その働き方や働く目的は結構多様である。

まず挙げるのは、上記したような原則にもかかわらず働かない、少なくともフルには働かない、基本的に稼ぐ気が余らない人々。「贅沢は要らないから自由を選びたい」と言う、インテリの高等遊民たちだ。稼がないから世の中に媚びる必要も常識に合わせる必要もないが、そうかと言ってインテリなので、既成の常識から自由で極めて独創的なアイデアや論議を次々に発信している。私のブログ友達では、

ヒロシさん(<http://blogs.yahoo.co.jp/ureeruhiroshi>)とか

水がめ座さん(<http://blogs.yahoo.co.jp/aquarius1969newage>)

とかが居る。

次に定職に就いて働く人々。これが大多数だ。以前に「あなたは働くために食っていますか、それとも食うために働いていますか」と言うアンケートを取ったが、9割以上が「食うために働いている」と答えた。基本的に「仕事が好きだからタダでもやりたい」と言う人たちは例外的で、ほとんどが「仕方なく」働いている。ただその「仕方なく」にも大きく差があって、大して苦痛にならない人も居れば死ぬほど苦痛な人もいる。死ぬほど苦痛な中にも2種類あって、「もっと別のことをしたい」(例えば自己研さんしたいとか見聞を広めたい)と言う積極派も居れば、「とにかく縛られるのが嫌だ」と言う消極派も居る。

最近日本も欧米化してきて貧富の差が出てきたが、そのありようは基本的に、「多数の貧者と少数の超金持ち」と言う非対称な分布である。その内の少数の金持ちの側だが、「義務と権利の表裏関係」に基づけば、彼らはより高い能力や緊張を要求されて重い判断をしているはずだ。ただ彼らの中にも、「贅沢がしたいから頑張ってる」金持ちと、逆に「仕事で頑張りたいから余暇は思い切りやる」金持ちの2種類が居て、おそらく前者の方が多いただろう。要するに「働かなくても贅沢ができるならそれに越し

瞑想録(その4)

たことはない」と言う人々で、そのマインドは義務労働の貧民と余り変わらない。

そう言った多様な労働者が、基本的に自分のライフスタイルに合った職種を選択している訳だ。職場も多種多様で、まず大区分として自営業と雇用者と言う分類がある。前者は自由が効く代わりに倒産も自己責任で負わないといけない。他方後者は、自由は少ないがその代わりに最大の不幸でも高々首程度だ。ハイリスク・ハイリターンか、ローリスク・ローリターンのいずれか、さもないと誰もその仕事を選ばないか、あるいは多くの人が過当競争的にその仕事を奪い合う。世の中そう調子良くはいかないように出来ている。アダム・スミスは生きている。

この中で雇われ人を選んだ人には、ここでまた大きく、会社か役所かの選択がある。もちろん会社と言っても公益企業とか一部の大会社は、多分にお役所的ではあるが。一般に役所の方が給料は低いけど仕事は楽だ。これは日本だけでなく欧米でもそうだ。また、役所の方が仕事はつまらないが威張れる。更に役所の方が数値としての業績よりも仲の良さとか人柄の温厚さの方が重視される。加えて役所の方が社宅等の福利厚生に厚いが、その社宅での人間関係は仕事場の延長で面倒くさかったりする。更にさらに、役所は往々にしてその自治体の政治家と言う一種の山師に、事実上仕切られていたりする。一言で言えば矛盾の塊だ。人格者には居にくい。会社はそれらの逆で、人格は卑しくても稼げば勝者で出世もし、私生活は自由だ。と言うことは、人格者はズルや抜け駆けやウソができないので、大抵稼げない。

こうつらつら見て行くと、仕事場の種類は多種多様だが、どれも「帯に短く襷に長い」と言った感じで、特に人格形成と言う見地からは、職種に関わらずおよそ理想から程遠い。これは大昔の中国でも既にそうで、「天道は微なり」と言う言葉もある。つまり「天の理想は地上ではほんの僅かしか実現していない」と言う訳だ。

人格形成などと言うと青臭く聞こえるが、サラリーマンの常套句の「保身」、彼らは目先の責任逃れのための生きる小知恵かのように使っている、言わば「ミクロ保身」だが、こういう使い方をしているうちは、ちゃっかりやっているようで実はまだ体よく使われているのだ。本当の意味での保身、つまり一度しかない人生を如何に有意義に楽しく過ごすかの「マクロ保身」、このための広い知恵は平常心から来る。つまり均整のとれた人格形成から来るのだ。だから人生の時間の多くを取られるところが、「時間賃金変換機」のように味気ない物だったらバカらしいではないか。

その「哀れなサラリーマン」のなれの果てが、「定年になったらやることがまるでなくて、毎日テレビやレンタルビデオで時間つぶしをしている老人たち」だ。「ちゃっかりやって

瞑想録(その4)

子会社の部長くらいにはしてもらいました」程度の人たちが良く罹患する、これはもう病気だ。この手の人々の後半生の主体性の無さ、やりがいの無さは、そもそも現役時代にサボったつけの自業自得ではあるものの、ほとんど生活保護者のそれに近い。

私個人としては、その人に断固とした人生目標があるのなら、40歳を過ぎたら高等遊民に転進することを勧める。それがその人のためだけでなく世の中のためでもあるのだ。ますます迫りくる世界標準化によって、人々の平等意識は高まる。そうすると一昔前の教師、あるいは今の大学教授も大衆化して特に高学歴でもなくなって、「なんであいつらばかり自由が多いのだ」と言うことになる。加えて年金負担軽減のため「全員65歳まで働け」と言うことになる。こうなってくるとそれまであった世間の余裕、具体的には地域のボランティアの戦力になっていたような人々が居なくなって、日本人全員が余裕のない奴隷一色になってしまう。

一色の世界はシステムのにも脆弱で危ない。ましてや革新的な新文化はおおよそ出てこない。例えば3世紀前のオランダでは集団指導体制に移行した途端に、平等や全員参加と引き換えに、文化や芸術や国力が一気に衰退した。歴史的にも前例があるのだ。この先進国が陥りやすい落とし穴に、今の日本は向かっている。この罠から日本と世界を救えるのは、会社員でも役人でもなく、自ら志願した高等遊民たちである。

「無用の用」という言葉があり、数学者が自らを正当化するのに用いたりするが、本当の無用の用とは高等遊民、つまり既存の「用」の定義では単なる型破りな遊び人にしか見えないが、その実は革新的な新文化を創造する、赤瀬川源平さんとかやしきタカジンさんのような人たちである。一人でも多くの高等遊民が出て欲しい。

4、クソゲーと毛沢東

「クソゲー」、若い人ならだれでも知っているが、「くそつまらないゲーム」のことである。パソコンやスマートフォンの発達でデジタルゲーム(オンラインゲーム)も花盛りで、今や1日に1本以上の新作ゲームが発表されている。無料のゲームや、少なくともベーシックでは課金なしのゲームが多いが、例えば「モンスターストライク」とか「信長の野望」のように多くの愛好者が集まる、言わば人気者になるゲームはごくわずかで、多くのゲームは「タダでもやりたくないほどつまらない」と言う、いわゆるクソゲーでその社会寿命を終える。

なぜ意味なくクソゲーが生産されるのであろうか。中にはゲームクリエイターの仕事をしたと言うアリバイ作りとしての、「始めからクソゲー」と言うゲームもあるだろうが、

瞑想録(その4)

多くは「実際に提供してみないと人気のほどは分からないから」なのだ。今は大流行の「妖怪ウォッチ」や「ポケモン」や「モンスター」等だって、提供開始時点ではよもやここまで人気が出るとは思っていなかっただろう。ただ、これらは幸運な例だ。そして大多数は、「意外とダメだった」とか「やっぱりダメだった」とか「敢えて冒険してみたが勇み足だった」みたいな終わり方をする。これらが結果としてクソゲーになる訳だ。もちろん製作費の元は取れない。

しかし今までの歴史を見回しても、「くそ〇〇」を造らなかった芸術家などおよそ居ない。芥川龍之介だって太宰治だって、またピカソだってシャガールだって、山ほどのくそ文学やくそ絵画を実は残している。単に名作の影に隠れて目立たないだけだ。「主役しかやったことがない」と言われた三船敏郎だって若いころは頭が狂ったおじさんのチョイ役をやったし、負けたことがない正義の味方の力道山だって若いころは悪役レスラーをやっていた。世の中の実態とはそういうものなのだ。だからゲームの世界でも「クソゲーを作ったことのない者だけがクソゲーを笑うが良い」と言う言葉がある。そもそもより一般的に、「どんなテーマにも必ず納得できる解がある」という思い込みの方が、余りにも素朴でお人好しすぎるのだ。

その意味では人生万事、難問にぶち当たった時に、「手遅れになる前にその有効な解決法を思いつける」と言う方が、希であって幸運なのだ。さもなければ年間に会社は何万件も倒産するはずがない。ほとんど崖淵で「辞めさせ部屋」まで出来ていたミクシーが、ダメ元で世に出したSNSゲームの「モンスターストライク」で起死回生した。ビルゲイツでさえ娘がはまりすぎて禁止した「ファイナルファンタジー」だって、ゲームハウスのスクウェアが「これがダメなら会社は終わり」という意味で出したので「ファイナル」と言う訳だったが、逆転ホームランで大当たりした。だが、こんな調子の良いことは現実的には極めて希だ。まあ、「ツキのある奴は結構いつもついている」と言ったジंकスはあるようだが。

この意味で、中国共産党の父である毛沢東(もうたくとう)は「ついていた人」と言えるかもしれない。先の大戦前後に中国共産党を率いた彼は、日本が去った空白時に国民党の蒋介石と覇権を争い、当初は明らかに不利だったものを絶妙な指導力で勝利に導き、蒋介石を台湾に追っ払い、中国大陆全土を掌握し、その手腕により主席に就任して全権を掌握した。ところがその後の経済政策で躓き、ほとんど地位を追われそうになった彼は、保有する権限の確保のために、別荘にこもって次の手を瞑想した。

そしてここがついている人の真骨頂なのだが、起死回生のウルトラCを思いつく。即ち後に「極端な毛沢東主義」として世界から批判されることになる、共産主義原理運動

瞑想録(その4)

である。この思いつきはその分かりやすさから多くの大衆を扇動して、紅衛兵なる組織が形成され、彼らが主導して文化大革命を実行し、毛は神格されて復権した。普通の人はこう渡りに船でウルトラCを思いつけるほど調子良くないのだ。

そして彼は自己の神格化と引き換えに多くの文化人を殺戮または追放して中国の社会進歩を遅らせただけでなく、その極端で分かりやすい害毒思想はカンボジアを始め世界中に広まって、多くの国や地域を「キリングフィールド」にした。だから世界規模で見れば、彼の個人的幸運は世界にとっての不幸の始まりでもあったのである。だがひとたび権力を握った者は、他人の迷惑などおおよそ考えない。

と言う訳で、良くも悪くも「ついている人」や「ついている会社」はあるもので、その「ついている」とは、クソゲーと逆に「土壇場でのひねり出しがなぜかくそでない」ことなのだが、ただこのツキも「永遠に」ではない。毛沢東の場合、彼は無事に病床で死ねたが、それも自分の妻の1人を含む「四人組」に罪をなすりつけることによって、言わば「ずるくかろうじて」であり、そして彼の後半生は、今は批判の的になっている。また日本では、「人たらし」の豊臣秀吉も病床で死ねたものの、その後の豊臣家の凋落は目を覆うばかりであった。気を付けなければならないのは、「ツキ」と言うものはついている人でも永遠ではないということである。

だからミクシーもスクウェアも、この次の崖淵でも依然としてついているとは限らない。今回のツキを「自分の所だけはクソゲーは無い」などと無反省に思い込んで傲慢になってしまうと、山一証券のように破綻が待っている。ましてやこれらの会社の属する業界は、ニンテンドーを見れば分かるように、毎年天国と地獄を行き来する、生き馬の目を抜く戦国業界なのである。

5、日常に構造を見出す

先日フジテレビのシナリオコンクールで、初挑戦の素人女性が大賞に輝いた。そしてその受賞理由が、「型通りでないこと」「セオリーから外れていること」だった。伝統芸術、例えば能や歌舞伎や華道茶道等は「型から入る」のが当然であるものの、この例からも分かるように、現代の大衆文学や演芸の世界で視聴者が待望しているのは、むしろ「型破り」の方なのだ。学問や評論の世界でも、これら人文系諸分野に好まれるのは、専ら「公式通りでないこと」や「むしろ例外的であること」であって、「類似していること」「前例に似ていること」「良く集約されているか」とはあまり好まれない。

瞑想録(その4)

例えば三島由紀夫の文学を論じるときに、これを「死の美学」と総括したところで、それ自体は当たってはいるものの、この総括が彼の作品に固有の世界や情景をどれだけ伝えたことになるだろうか。だから評論者の良い仕事とは多分に、「新しい例外を探すこと」とか「総括則から出来るだけ外れること」だ。前例から離れているほど評価は高い。つまり、文芸や人文科学は、そもそも法則化を拒否しているのだ。

それにも拘らず人文系諸分野にも、一定の法則や類似性を見出した碩学が幾人か居る。山折哲雄さん、山川静さん、山本七平さん、トインビーさんと言った先生たちだ。山折先生は徹底して多神教の立場に立つ人だが、キリスト教の使徒パウロと浄土真宗の開祖の親鸞との間の類似性を論じている。山川先生は「漢字は基本的に象形だ」との立場から多くの漢字の象形的意味を提案した。山本さんはヘブライ世界を鏡にして日本人の特異性を一貫して論じた。そしてトインビーさんは歴史に一定の法則があるとして「文明の邂逅が新宗教を作る」と法則化した。

これらの先生はいずれもその着目点の特異さによって注目されたが、「文系分野に同じ事など2つとない」が鉄則の常識であり、しかも「類似・非類似は個人の感覚や着目点等に左右される」と言う難しさもあって、これらの類似性や構造の発見は決して直ちに認容された訳ではなく、むしろ大きな議論や根強い嫌悪を呼び起こし、いままって反対論は根強い。敢えて言えばこれらの諸先生の手柄は、指摘した類似構造もさることながら、「大胆な提案を通して議論を活性化させた」面の方が、よほど意義があるとも思えるほどなのだ。山本先生などはウィキペディアで、「この人の知識は幼稚である」などと露骨に書かれている。むしろ芥川賞作家の森敦(もりあつし)の「月山」のように、出来事を淡々と書き連ねていって「それ以上は読者に読んでもらう」方が、現実的にはより無難なのだ。

ちなみに不肖私は、「当たり前の事実よりも意外な気付きの方が、仮に間違っているも尊い」という立場を取っているが、その信念はこれらの先生の手法と成果の大きさに多大の影響を受けている。そしてもちろん、私などこれらの碩学にはおよそ及ばないものの、今までの当ブログでいくつかの事象間の類似性や並行性を論じてきた。例えば「クソリプとほめ殺しと氷水かぶり」、あるいは「ゆとり教育とチャウシェスク等の独裁者」、あるいは「ミクシーと毛沢東」と言った一見無関係な事象の間の類似面をつらつら提案してきた。もちろん物事は全て多面的であるところの、あくまでもその一面の類似性であり、かつ類似の程度(足切り)には個人差があるので、これらの提案内容はあくまでも蓋然的であり、かつ誤解のリスクがあることを認識した上での提案である。

瞑想録(その4)

しかも世の中の多様な事象の類似性を議論することは同時に、個々の事象の個性ある部分を、どうしてもある程度無視することになってしまうために、「なぜわざわざくっつけるのか気持ちが知れない」と言った反論は当然あることになる。要するに類似を総括する行為が批判者には、基本的姿勢が単純すぎて荒唐無稽かつ幼稚に映っている。では振り返って、先に挙げた碩学の先生たちは、何のために類似や構造を論じているのだろう。

「パウロと親鸞が似ている」と提起しても、キリスト教と浄土真宗の双方からアレルギー的な謝絶が出て、単に人騒がせになるだけではないのか。ただ、学問と離れた現場レベルでは、厳密さや論証がそこまで問われないこともあって、例えば歴代首相の業績や考えを並列するとか、衆議院の歴代の解散の背景と実態を比較するとか、日清日露の2戦争あるいは2回の世界大戦を相互比較しようと言う種類の行いは良く見受けられるし、現に読者に分かりやすい。

私は文系諸事象であっても、比較に意味がないとは思わない。単に類似性を語って見せただけならあるいは概念の遊びや銜学に見えるかもしれない。だがこれらの先生はそれらの類似性を通して人類全般に共通の、人に共通な基本的習性を見出そうとしているのだ。例えば山折先生の提案からは「なぜ人は一神教やカルトを作りやすいのか」と言う素朴な疑問へのヒントが見える。

トインビー先生からは「人の幸せとは何か、喜びか任務か」と言う素朴な疑問についての考えるヒントをもたらしてくれる。山本先生からは「グローバルスタンダードは常に最良か」と言う素朴な疑問への反面的ヒントがもらえるように思う。このような統一的理解は理系の諸分野では当然の方向だが、「事象が全部異なる」が鉄則の人文系諸分野でも、反論があるのは承知で敢えて提案する行為は、結果として人類智の大きな増加につながると確信している。

先に挙げた私の提案では、「クソリプとほめ殺しと氷水かぶり」の例から、「正の対応をすればするほど当初の目的からずれていく『はめ込み罠』とも言うべき人工ロジックの構造」の不条理を、「ゆとり教育とチャウシェスク等の独裁者」の例からは「人の気付きとそれを実現することの間にある深い溝」を、「ミクシーと毛沢東」の例からは「人のツキとその限界ないしっぺ返し」と言う、これまた人の業(ごう)とでも言うべき因縁関係あるいは「自動システム」をあぶり出したつもりである。これら導出された人間に固有の諸性質は、もし仮に私が引用した例が適切でなかったとしても、よりメタな人の行動様式として、より普遍に認定でき得るのではないかと期待している。

瞑想録(その4)

ちなみに、「仮に具体例が適切でなかったとしても」と書き進むと逆に、「一般則が見出されたなら、具体例はもはや不要ではないか」と問われるかもしれない。ところが先にも断わったように「一般則は現実の尾鰭(ひれ)とか背びれを無視した上での導出」であるために、一般則には一般則の、具体例には具体例の、それぞれの固有価値と言うか固有の情報があって、「一般も具体も共存して大切」と言うのが人文科学の、あるいはより広く日常の事物全体の、自然的態様だ。これはだれしもが経験していることであろうし、この表明が人文系における一般則導出の価値と限界を、最も適切に表現していると思料する。

そして私の最終目標は、これらの提案に存在意義があるとされた上で、さらにそれから得られるより上位の言わばメタ知識としての、一定のアルゴリズムの導出にある。アルゴリズムとは自然言語を越えた広義の演算のことである。ただ現状は残念ながら、アルゴリズムの導出には至っていないが。だが「アルゴリズム化は物事をあたかも数値のように物事を内に縛ってしまって、『違いをこそ掘り出す』と言う人文系の究極の随喜を白けさせるのではないか」と恐れられるだろう。従来の加減乗除に代表される数値アルゴリズムならおそらくそうなるだろう。だがここで、人文系の特徴に学んで、自律的に成長する、内にこもらない、あたかも年々成長する大木のような、自由度と適用度の高いアルゴリズムが求められたとしたらどうだろう。

こう言ったより応用度と可能性の高い一般原理がもし定式化できれば、それはそのまま「人とは何か」と言う素朴な疑問への総合的回答になるのみならず、更に進んで「人はどういう機構で物事を理解して判断・決断していくか」あるいは「人はどういうひらめきによって物事を発明・発見していくか」と言った、よりクリエイティブでかつ現場レベルでもニーズが高いスキルの解明にも結びついて行くものと思われる。つまりより高いレベルでの文理融合だ。

そのためには、あくまでも「一般論を導くためだ」と言う断り書き、つまり前提を明確にすることは誤解や誤用を避けるために必須だとしても、前提を断わりさえすればこういう統一的手法が、特定の碩学のひらめきと気まぐれによる単発の発見に留まるのではなく、より一般的な手順として定着するだろうし、こう言った一般化機運の人類智での定着は、非情に意義が高いと考える。

6、人工知能作成小説

最近のコンピューターの長足の進歩によって、人工知能研究もずいぶん進んでいる。画像認識が依然として苦手とはいえ、チェスはもちろん将棋でも名人と対等レベルに

瞑想録(その4)

達し、東大の入試問題もまあまあの点を取ると言う。このように特に論理が主要な分野に於いて、人工知能は日進月歩である。もちろん名人と人工知能では推論方法がまるで異なっていて、名人は基本的に直観勝負、対する人工知能はその裏に膨大な論理データベースがあって、1秒間に何億個も計算をするという力任せの勝負である。

このように人工知能の働きは完全にデジタル論理であるから、文学等芸術分野は原理的に向かないと思いきや、最近「人工知能で小説を作る」と言う研究が始まっている。まあ、文学は絵画や彫刻と異なり文字の列であるから、情理はともかく形式的な「情理もどき」を短い時間に多数吐き出すことは、おそらくできるだろう。この点に目を付けたと言う訳だ。例えば最近の漢字仮名変換機能では、同じ「おさめる」でも、「学問を修める」「国を治める」「税金を納める」、これらそれぞれ全部一発変換である。コンピューターが意味を理解している訳ではないが、形式理解が「てにおは」を超えた所まで進歩しているのだ。この遥かな延長線上に、小説創作を狙おうと言う訳である。

こう見て行くと「人工知能による小説創作」も、あながち荒唐無稽な研究とも言えなくなってくる。もちろん、「最後には作家が不要になって、全ての小説は機械が作るような時代に至る」などとは思っていない。コンピューターの論理がどんなにきめ細かくなっても、どうしても論理では割り切れない純粋情理あるいは純粋意味論の領域があるのだから、ここが限界になる。情理や意味論は全くアナログの世界であるから、アナログコンピュータあるいは少なくとも近似度が十分に高いデジタル近似コンピュータ（近似ソフトを含む）が開発されない限り、「コンピューター竜王」はあっても「コンピューター龍之介」はありえないのだ。

現に現在の意味論研究も、意味の構造（多分に統一原理がなし、線形空間にもはまらない、極めて各論的な分野）を正面から分析すると言うよりも、「形式論理で意味をどれだけ代理把握できるか」という、言わばアナログ固有の領域を如何に狭められるかの研究が主流である。この辺は、「ゲーデルの不完全性定理に反してどこまで論理完全領域を拡大できるか」を日夜研究している数学基礎論と、様相が似ていなくもない。

つまり上々に行っても、最後に良い作品を評価選定するのは、本来の情理を有する人類のアナログ能力に頼ることになる。ただ、人の作品にも出来の良し悪しがある。特に最近のブログや電子出版ツールの発達により、いわゆる素人愛好者、あるいは土日作家とでも呼ぶ層がかなり興隆してきたが、彼らの構造的な問題点は、従来の

瞑想録(その4)

紙の出版と異なって間にプロの編集人のフィルターがかまないために、そもそも玉石混交な作品群であって、しかも「石」方の割合が増えていることだ。むしろ「ほとんどが駄作だ」と言って良い。つまり読者の側から見れば、良い作品にはめったに当たれないと言う構造、あるいは情報を選ぶのに情報が要ると言う「無限ループ」の悪循環になってしまっているのだ。

こういう現状に鑑みると、あるいは人工知能小説技術が進歩した暁には、選定をするのは依然として人間ではあるものの、「素人の人間が描いた作品の中から玉を探すよりも、人工知能が描いた作品から玉を探す方が、より効率良く見出せる」と言う時点はあり得るように思う。こうなると文学界に必要なのは、一握りの天才や編集人だけで良くて、実は世の中にいっぱい居る「小説で売りたい夢見人たち」や「趣味で小説を書く土日作家たち」は、そのほとんどがその居場所を失うことになる。

ただ、人工知能の方にも乗り越えが容易でない問題がいくつか存在している。第1にマクロなあらすじの問題である。人工知能のルールは基本的にミクロなローカルルールであるため、将棋とか入試のように効率勝負でかつミクロの単純積み上げがマクロになるような問題ではマクロな世界でも結果を出せたが、小説の骨太なテーマあるいはモチーフあるいは固有の世界観を流れの始めから終りまで外さずに維持できるか、これはかなり難しい問題である。第2に遊びの問題がある。小説やドラマは娯楽であるから、効率よりも遊びの面白さや息抜きの余白が適度に欲しい所、こう言ったものを程良くちりばめることができるかと言う、言わば効率外しの問題である。これも結構難しい問題だろう。

で、仮に何らかの技術開発でこういった小説固有の問題が、意味論の本陣に立ち入ることなく解決できたとしよう。CADならぬCAW(computer aided writing)の時代の到来である。ただこれほどに技術が発達しても、人工知能は個性の無い高々良い秘書の位置づけになる。なぜならばデジタルコンピューターに作業させる以上その仕事は完全再現性を持つ、つまり科学と同じくらいに融通のきかない、同じ条件に同じ答えしか出せない物だからだ。人が、もちろん程度の高低はあるが十人十色で世の中が多様で面白いのは、一人一人の個性が違うからであって、この個性の大元は、先天的後天的な、経験と教育の賜物なのだ。つまり世の中の本当の「ご主人様」は、完全再現性がないことが、逆説的だが必須条件であって、だから仮に何らかの計算機であったとしても1台1台別個に造られ教育されなければ、それは永遠に世の中の「主人」となって人様に代わることはありえないのだ。

瞑想録(その4)

そしてこの「一台一台全部異なっていて、結局は手間暇かけて育て上げるしかない」、この大量生産できない特徴こそ、もしアナログコンピュータなるものが世に出たら必然的に持ち合わせる性質になる。アナログコンピュータに於いては、幸か不幸か、「一括流れ作業の大量生産」と言うことはありえない。

7、論理とビジュアル



人による事物の理解・判断の仕方には2通りがある。すなわち論理による理解とビジュアル的な理解だ。例えば碁や将棋、棋士は全体観をビジュアルに観じつつ、他方で定石を論理的に用いて、しかもこれらを同時にかつ瞬時に組み合わせて、次の手を打つ。相撲だってそうだ。関取は相手の隙を体全体で探り当てて、直ちに打つべき決まり手を選んで勝負にかかる。我々の日常茶飯事だって違わない。メニューのサンプルを見ながら、同時に値段と言う数字も比較した上で、オーダーをする。ところがこの論理とビジュアル、それぞれ典型的にデジタルとアナログであって水と油、あるいは対極にある。それにも拘らず同時に作動できるとはどういうことであろうか。

デジタルは基本的に「点の思考」である。そこには画像など併存しない。「100円より240円の方が高い」と思うとき、頭の中にいちいち絵など浮かばず、単に数字を比較するだけだ。他方ビジュアルは「連続体の思考」である。「マスの思考」と言っても良い。そこには何らかの具体的なイメージが伴う。これらはいずれもそれぞれのメリットがある。

論理思考はビット数が少ない。点だからだ。だから基本的に、単純当てはめならば脳への負荷は軽微だ。論理学が難しいのはその推論形式に慣れていない、あるいはその推論の現在の現在の問題への適応の仕方が見えないと言った付加的な要因があ

瞑想録(その4)

るからであって、盲目的な論理の適用そのものはビット数や脳への負荷が少ないメリットがある。他方ビジュアルは、ビット数は高いが、従って脳の負荷は高く、同時に複数の絵を描くことは不可能なほどだが、対象をありのままに、言語化による情報の損失と言う大きなデメリットを被ることなく、ほぼ細大漏らさずに脳に焼きつけられる。このリアリティがビジュアルのメリットだ。

そして論理もビジュアルもその大元は人の防衛自己保存本能と言う単一の目標から来ているのだから、これらは水と油と言いながらも何らかの方法で密接に相互補完的であり、かつ相互補完することにより最大効率の防衛効果を発揮していることになる。その原理の詳細を我々人類が理解できようができまいが全く関係なく、現にそうなのである。

さてこの不可思議なリンクだが、私はこう考えている。以前指摘したようにこの世のあらゆる事物は、マッチ棒のようなつまらない物から源氏物語のような長々しい空想に至るまですべて「連続体」と言うマスであるが、連続体は当然に「多面体」でもあり、従って無限個の「タグ」を有している。例えば上の画像のような複雑な物を見て、「複雑だな」「丸い」「縁がある」「おいしそうだ」「干からびたゲロじゃないか」「ハムの切れ端が見える」等々人により状況により色んな「感想」のようなものを持つ。これすら持たないのがヨガの究極の境地なのだが、それでは単に形も色も不定な単なるビットの羅列に過ぎない。それはそれで正しいのだが、現実の生活ではこの「タグ付きビジュアル」が一番現実的なのだ。そしてタグが本質に近くかつ太くて多いほど、かつそれらのタグが「素のビジュアルイメージ」を壊さずに拾っているほど、その人は鋭い知恵と気付きを持っている、つまり地頭が良いと言える。

このタグは、「素朴な気付きの芽(germ)」のようなもので、ほとんどビジュアルに近い物もあれば、ほとんど論理化しているものもあり多様であるが、人は様々な経験により異なったものや似たものに同じようなタグを何回かつけると、そのタグ自体が定式化・固定化して行って、より形式的に、つまり一々ビジュアルのビットを展開するまでもなく、より省エネでそのタグを独立して操ることができるようになる。こう言ったタグが束ねられ定式化された極限が、論理と言う形式であろう。連続体の観点からは点は本当に「幅が無い」のではなく、「幅が無いと言う極限」なのだ。一般にタグが定式化すればするほど、関係するビット数は零に近づいて行く。

ではこのようにして、ビジュアルがタグを通して論理の極限に至るとして、水と油の論理とビジュアルはどのように、動的に密接に結びついているのであろうか。「狩猟民族 vs. 農耕民族」的な分かりやすい割り切り方で言えば、「論理は左脳 vs. 感情は右脳」の

瞑想録(その4)

住み分けをしていて、それらの間がニューロンやシナプスで連絡されていて、それこそタグのきっかけで発火した電気信号が行き来しているということになる。

例えば次の会話を見よう。「太郎は寝坊だからまだ起きていないだろう」「さっき見たから起きているよ」。この会話では論理の表明に対してビジュアルで返すと言う、形式的には矛盾した構成となるが、それでも会話は成り立っている。世の中の認識や決断に関わる事象は、ほとんど全てがこの調子なのだ。水と油がタグを媒介に頻繁に交信している。ただし脳における交信の具体的態様については、脳外科科学の分野に属するのであり、一般的な観想や瞑想で理解できる範囲ではおよそない。瞑想も万能ではないのだ。

「論理が先かビジュアルが先か」と問われれば、もし以上の瞑想が正しいならば「基本的にビジュアルが先行する」と言うことになるが、時としてそれでは効率が悪いために、あえて教育や学習と言う仕組みがあって、天下り式に論理から習うと言う行為が、人に自然か否かは別にして、慣行として奨励されている。例えば医学生とか法学生への論理的教授だ。ただしこれらの天下り論理も、追体験で確認されなければ多分に空念仏で終わる。良くある安っぽい原理主義だ。そのために実験とかインターンとかイソ弁とかの、実地訓練で暗記論理を肉体化する慣行がある。

人間工学では操作員のスキルを、ナレッジベース、ルールベース、スキルベースの3段階にわけて論じている。そしてスキルベースの捜査員をベテランと呼ぶ。ルールの論理だけでなく、操作対象を自らの手足のように自在に弁えている。そんな彼らが想定外に遭遇した時には、人工知能に典型的に見られるように、もはや適用できるルールなど無く、まさにビジュアルな全体観と直観によるひらめきの勝負になる。スキルを深さとすれば全体観は幅だ。そして深さと幅の双方を持ちあわすことが、操作員のみならず、人生の達人となる。

最後に、「消費増税→企業減税→海外企業の日本進出→雇用とGNPの増加→女性進出と外国人呼び込みと地方の活性化→人口増加と国力増強→国際発言力強大→敵性国制圧と国体護持」と言う論理順序、これはどうだろう。高度に論理の連鎖でおおよそ情景がないが、これがアベノミクスの全てだ。極めて明快かつ統一論的だが、言い換えればこの連鎖の1つでもほころべばアベノミクスはダメになる。情理の権化たる政治の寝技が実は論理のみで出来ているとは、ちょっと不思議な現象だ。安倍さんもこう言う「分かりやすいスローガン」で人をだましていうちは良いが、自分までだますと土ッポにはまるぞ。

8、源氏物語ピンポイント

源氏物語、日本の誇る古典であり、全54帖で約100万文字、極めて長編である。この長編について次のような会話が普通にある。「ねえ、今回のTVドラマ、何気に源氏物語に似ていない?」「ああ、あの話、そうだね」。特段取り上げるほどの無い会話に見えるが、なぜこのような会話が通じて、お互いに理解し合えるのだろうか。源氏物語は長編だから当然にかなり大きな連続体だ。個々の部分を細かく見れば色々な異なったエピソードがあるし、特に後半の「宇治十帖」はいささか異なっている。その多様の極みとも言えるものなのに、「あれ」と1点でさもデジタルにピンポイントしている。「あの辺」とか「あの話の〇〇の部分」とかならまだ分かるが、この会話ではズバリ一点指示の「あれ」である。どうしてこのような理解ができるのだろうか。考えれば不思議なことである。

今回提起した問題点は要約すると、アナログ連続体をあたかもデジタルな点に扱っている矛盾の、その矛盾の構造が分からないということである。そしてこの構造はおそらく、この会話者それぞれが、この長編に関する確固とした「全体観」あるいはモチーフ理解を有していて、その全体観が、もちろん連続体の中心の役割をする点のように狭い部分だが、それで連続体を代表させて「あれ」と言っているのだろう。つまり「本来は連続体、マスである」と言う原則と必ずしも矛盾している訳ではない。だからこの会話に引き続いてさらに、「特に葵の上のキャラが似ているわね」とか「光源氏が遊び人なのに嫌らしくない所が似ているわね」などと、会話を進めて連続体の各所に展開していくことができる。モチーフ理解とは言わば、「疑似ロジックレベル」まで至った理解とでも言えようか。

もちろん話題の対象は源氏物語でなくても、水滸伝だろうがカラマーゾフの兄弟だろうが何でも良い。それどころか逆に全然つまらない物、例えばビール瓶だって、これも認識上は立派な連続体なのだから、余り目立たないだけで実は全く同様の問題を抱えている。「ビール瓶ってマッチ棒に似ているわね」「どこがだよ」「つまらない所よ」「なるほどね」、こういう会話が成り立つのも、先の源氏物語と全く同じ構造で、何らの遜色もない。逆に言えば「全体観について疑似ロジックレベルの理解に達して、初めて理解したと言える」とも表現できる。これは「理解」と言う行為について、「どれだけ深く理解したら『理解した』と言えるのか」と言う根本的命題に対する1つの回答になっている。また先日の記事の「人工知能製造小説」について、その「作品」を誰がどう読んでも全体像が理解できない代物だとしたら、それはその作品が一貫したモチーフすらない、問題外の駄作だ、ということになる。

瞑想録(その4)

続いてここで、前節で提起した、「理解するとは何か」をもう少し掘り下げてみよう。連続体の観点からは、点集合と異なり、「アトム」のような最小単位は無いのだから、掘り下げたければ、意味のあるなしは別として、いくらでも掘り下げられる。だから現実的には「ここまで掘ればとりあえず十分だ」という足切りが必要になる。そして先に提案した足切りレベルは、「全体観が形成されるまで」であった。もちろん個々の足切りレベルは、用途に応じて色々あって良い。例えば「当面の目的に十分なレベルまで」とか「人間の人体構造や本能レベルに至るまで」とか「奥に隠れた深い意図をくみ取ることができるまで」とか「関係事象について何らかの決断をするのに十分なレベルまで」とかが代表だろう。

悟りのお釈迦様でさえ、「もし矢に刺された時に、『この矢はだれが、いつ、どうやって作ったのか理解するまで、この矢を抜かないぞ』などと言っていたら意味なく死んでしまう」と、無価値な掘り下げを戒めている。器物を使うとか直すのが目的の場合、「目的が達せられる」で十分だ。リモコンの構造を知らなくてもTVのチャンネルさえ変えられれば十分なのだ。他方でこれまでのいくつかの記事で、「この能力は人の防衛本能に基づくので」と根拠してきた。これは足切りレベルを「人レベルまで」としたことに当たる。それぞれその立ち位置さえ明示すれば、そのレベルで「私は理解した」と断言して、決して不遜ではない。

ただ、本日の以上の議論は、理解の全体形式及び足切りレベルのあり方について述べてみたものであって、「理解する」あるいは更に進んで「決断する」の具体的な要因や態様についてはまだ言及解明していない。そもそも上記のどの足切りレベルでも良いから、「源氏物語を理解した」とは頭脳または意識のどうなった状態を言っているのか？ かつ、「理解した・していない」はどういう過程を経るのか、しかもその過程はアナログ・デジタル交信のどういうありように依っているのか、これは大きな問題なので容易には回答できないが、だからこそ「理解の構造」は瞑想のやり甲斐がある問題であるとも言える。

この問題については既に2, 3の記事でその取りかかりとなる瞑想を始めた所であるが、今後更に色々なきっかけや側面を通して、思念して行かなければならないと考えている。私なりの答えはもう少し待ってほしい。本日は長編や連続体を「あれ」とピンポイントできる構造まで見ました。

9、思索の肥やしたる自然科学

瞑想録(その4)

最近特に、ゆとり教育の尾を引く理系離れへの危機感から、「理系学生増産プロジェクト」のようなスローガンが耳につく。例えば女性進出と絡めて一挙両得を狙った「リケジョ」のヨイショとか、でんじろう先生の実験講座のTV放映とかだ。昨日打ち上げに成功した「はやぶさ2」も、ことさらに理系の興味を誘引させるような宣伝の仕方をしている。

なぜこうしてまで理系学生を増やしたいのだろうか。「理系の学問が本当に面白いからだ」とか、「理系の学問は論理力と人格を高めるからだ」とか、そう言うきれいな理由ではないことは明らかだ。たまたま理系が大好きな学生がそれを勉強するのは勝手だが、実際の理由は、理系が生産する種々の技術開発が結果として、最近ますます重視されている国力増強あるいは経済成長の、直接的な原動力となっているからだ。

つまり安倍さんならずとも国民の多くが大なり小なり願っている、日本の経済成長による自分たちの生活の質の向上と国防力の確保、これの実現のためには理系人間が少しでも多いことが必須かつ喫緊になっているということだ。だからこれら一連のプロパガンダは、進路を文系にしようか理系にしようか迷っている「中間層」の学生を、出来るだけ理系側に誘引させて経済戦争の先兵に仕立てようと言う、言わば目先の功利主義的な、役に立つ高級奴隷の量産計画なのだ。

私も国民の一人としてはこのプロジェクトに大賛成だが、間違っても自分がこのプロパガンダの餌食になって人生を棒に振りたくない。つまり「総論賛成各論反対」の立場なのだが、これはズルでも矛盾でも何でも無い。単に集団力学のエゴに騙されないための護身術だ。私自身実は図らずも研究職として、多くの技術者と付き合ってきたが、学界のエライセンセイを含めて、人格者にであったことなどおおよそない。むしろガキ大人の幼稚な人間がほとんどだった。だから人生の目標が人格形成であった私は、ほとんどいつも浮いていた。当たり前だろう、それこそ「木に寄って魚を求める」行為だったからだ。間違っていたのは周囲ではなく、この私なのだ。

では理系人間や自然科学の、経済的でなく哲学的な存在理由は何であろうか。この重要な質問に対して私が出した答え、それは「思弁や瞑想の肥やしになる」という価値だ。思念、瞑想、真理の発見、これらは智慧を愛する人々にとって至上の喜びである。思念や瞑想により、素朴な疑問についての解を得た時の、「矢が的に当たった」が如き喜びや随喜は、これはもう言葉に表せない。言語道断、一種の悟りを得た境地だ。

瞑想録(その4)

ところがその思念や瞑想も、「ただ座っていればいずれひらめく」と言うような単純なものではない。そもそも、素朴な疑問に想到するにも経験が必要だし、その素朴な疑問に解決を与えるには、問題に直接間接に関係する幅広い情報が必要なのだ。直感で勝負する霊能者だって、ただ部屋に座っているだけで透視できてしまうのではなく、むしろ現場に出向いて全身をセンサーにして生の情報を取得しようとする。情報が多ければ多いほど、その予言者の的中度合いも高まるのだ。そして数理科学を始め理系の学問の最大にして最高の使命は、この精神的上位者への客観的かつ詳細な情報提供と事物の可視化にある。

私は学生のころから理系の学部に属していて、教師より日々実験技術を注入されてきた。大部分の同級生はその注入自体に無邪気に喜んでいたが、私は自分があたかも学界の外部記憶とされて体の良い兵隊に仕上げられていくことに重大な疑念と危機感を感じていた。早晩理系学問が虚しくなりこれを離れようとしたが、さりとて他のもっと面白そうな居場所も見つからず、結局今まで意に反して開発職で飯を食ってきた。そして長い瞑想の結果最近分かって来たのだが、理系学問自身には何の価値もない。あくまでも思念に情報を提供することによって、その提供情報により新しい哲学が生まれることにより、初めて正当化されるようなものなのだ。理系学問の成果は単に素材や道具に過ぎない。

先日のブログ記事で私は、数理経済学者のピケティ氏と気象の数値予測の例を挙げて、「デジタル計算機の飛躍的発展が新たな学問分野や哲学を開花させるきっかけになりえる」と指摘した。つまり、望遠鏡や顕微鏡と言った幾何光学的なツールが可視化世界を大きく広げてそれ以後の瞑想の発展に大きく寄与し、またインターネットが情報取得効率の飛躍的向上を通して人類の思念の世界を大きく広げたように、今まさにビッグデータ解析がそれ自体は単に可視化の道具に過ぎないものの、思念や瞑想の可能性を大きく拡大しようとしている。

顕微鏡やインターネットを考案した技術者はそれなりに偉いし、本人も発明に満足していることと思うが、彼らはあくまでも腕の良い鍛冶屋や精肉屋に過ぎない。大切なことはこれらの新規物をいかに使いこなして、得られた情報を人類の知的資産のレベルまで高めるかであって、この知的資産獲得のための思念と瞑想をやる人こそが、精神的貴族あるいは敬称としての高等遊民である。LEDの中村センセーはそれなりに偉いだろうし、こういう人から結果を多く吐き出させ絞り上げて取り上げるために、ノーベル賞程度のご褒美をくれてやるのは、「馬にニンジン」のごとくに相応である。だが一番大切なことは技術そのものにあるのではなく、こう言った開発された技術を如何

瞑想録(その4)

に使いこなして、今までになかったような、唸るような思想や輝きわたる喜びの新境地を見出して、人類に提供するかである。

私自身振り返ってみると、近年も余暇を見つけては旅行をしたりウォーキングをしたり、美術館や博物館巡りをしたり、フェスタやイベント巡りをしたり、あるいは寺社を巡って御朱印を集めて回ったりしたが、今振り返ってみると、最先端の科学技術よりもこう言った行いの方がはるかに啓発的で、人としての最高の境地である思念や瞑想によればど質の高いヒントをくれた。そもそもそうなるだろうと言う強い予感があったのだ。

本日の記事の終盤に来て、技術開発を話題とすることに何らかの価値があるのか疑問ではあるが、少し付け足したい。私は計算機を用いての数値解析にも従事していたが、ほとんどの技術者は例えばボイラーの温度が規制値以下であることを確認して、それで満足して終わっていたところ、私はその数値解析技術特有のデータの多さや精緻さが、きっと新たな洞察をもたらし得るだろうとの予感があったし、博士論文も一応そういうスタイルになっている。

だから、「理想化」と言う情報切り捨てを行った後のきれい事である「理論」では見出せないような微妙な真実が、その多彩なデータを上手くこねることにより、言わば「数値発見」によって新たな理論や哲学が見出されるだろうとの信念をもって研究開発作業に従事してきた。本日の記事もその経験に大きく勇気づけられている。2世紀も前のマルクスだって「数学草稿」を著したほど自然科学を肥やしにしたし、実際彼の哲学は「社会科学の分子運動論」と思えるほどに科学を肥やしにしている。

技術に使われるな。技術を使い倒せ。食い尽してウ〇チにしまえ。

2014. 12. 24

10、習合の国日本

アジアの中でも日本と言う国は、その位置的及び地形的な絶妙さにより、四季自然が美しい「美味し国」(うましくに)である。春夏秋冬の移ろい、山や川や木々や森、岩や滝や花々等々美しく輝く多様な風景と、しかもその移ろい、そしてそれにも拘らず毎年巡りくる季節折々の不思議さに満ちている。これほどの美しく、賢く、かつ謙遜な私たちを取り囲む環境は、およそ世界中で日本だけだろう。

そしてその自然の素晴らしさと多様さは必然的に、確固としているけれども言挙げをしない(ことさらに主義主張を叫ばない)アニミズム信仰の神道を生んだ。神道の基本

瞑想録(その4)

書である古事記と日本書紀は、当然のことながら、相異なる個性を持つ八百万の神々の、ダイナミックな交流の物語となっている。そしてこれが大和魂、つまり日本精神のバックボーンであることは幾多の先人、敢えて挙げるならば本居宣長等によって、口先や単なる思念でなく体験的に確認されて、今日に至っている。

この四季折々の移ろいゆく美しさを、生まれながらにDNAに刷り込まれている日本人は、当然ながらそのイデオロギー無縁の柔軟な心構えが、何物にも代えがたいことを体全体で知っている。そしてそのダイナミックな柔軟さが具体的に表れたのが、「習合」という風習である。習合とは”syncretism”のことであって、論理を越えた、矛盾をことさらに合理化せずに、敢えてそのまま内包する「神さび」(かんさび)の世界である。

集合と融合は全く異なる。神さびの世界観は日本誕生とともにあり、習合の風習はこの時既にあると言えるが、歴史上明確な最初の習合はおそらく「神中習合」、つまり八百万(やおよろず)と四神思想や五行思想等中国古典との習合ではないか。そして顕著な習合は何と言っても神仏習合である。

仏教が日本に伝わったのは白鳳時代であるが、早くも平安前期には神仏習合は顕著にあり、しかもその範囲は神道の「大本山」とも言うべき、皇室直系の伊勢神宮にまで及んでいる。伊勢神宮にも曼荼羅絵図があり、熊野三社はむしろ熊野権現と呼ばれて、神仏習合の高度な所産である修験道の聖地になり、歴代の天皇上皇の参詣場となった。

さてこの習合、神仏習合で見るならば神道と仏教が、融合しているのではなく習合しているのだ。つまり完全に溶け合っているわけではない。例えば人の不幸は、神道によれば祖先のせいであり仏教によれば前世のせいなのであるが、これらがそのまま残存し併存しているのだ。論理的には矛盾だらけで完全に破たんしている。欧米人等一神教の信徒にはこの状態は理解できない。彼らにとって習合は異端なのだが、それ以上に「不安で寝られない」が実感だ。日本にやってきたある外人が、「日本は地震国であって地面が揺れる」と聞いて恐怖のあまり足がすくんでいたが、これに近い心情である。

矛盾の2者が併存しているのなら、それらをどう折り合いをつけるのか、一神教と論理の世界に生きる彼らには、およそ見当もつかないのだ。だが日本人はこの程度の矛盾には慣れっこで、2者の存在領域を適切に定めて器用に使い分けている。何となくだが「この場合はこっち、あの場合はあっち」という訳だ。すると2者の境界線上ではどうなるのか？ 実はこの質問自体が点集合論を前提にしている愚かなのだ。

瞑想録(その4)

「全ての素朴な質問は善である」などと言う保証はない。狗子仏性(くしぶっせい)のごとくに愚かな質問は山ほどあるのであって、「境界線上」この発想がそもそも愚かなのだ。連続体(マス)の観点からは、そんな線など無い。単に適切にその場的に使い分ければ済むのであって、境界線などどうでも良いのだ。この、矛盾をバカにする器用さ、これこそが日本人の魂の力であって、この魂は武士道を通して現代日本人にしっかり遺伝している。

さて、「美しい自然から来る必然」とは言いながら、こうして定着した「習合力」はそれ以後の大和の国の骨となり、日本人はこれを自然に守っていくことになる。平安時代の次に来た武士の時代、つまり鎌倉時代から江戸時代までの約650年間、この間は朝廷と幕府が程良く併存したが、これまた日本の弾力性の源、つまりしなやかな強靱さとなった。皇室と幕府が習合した、言わば「皇幕習合」の時代である。そして江戸末期、日本は夷狄(いてき)の来襲に応じて尊王攘夷と佐幕に大きく二分した。そしてこれらが習合する前に開明派は攘夷が不可能と知って、弾力的に開国に舵を取る。ここにもその背景に日本人特有の融通力が見えている。

そして、開国には藩に分かれている日本をまとめる必要があり、そのシンボルは天皇以外にありえないとして、言わば「尊王開国」路線を選ぶが、このとき同時に「天皇を絶対君主とすべき」とする、国家神道の概念が誕生した。神道原理主義の人々は国家神道を人工的なニセの神道と呼ぶが、現実的には廃仏毀釈によって一旦神道を独立させた上での帝国主義との習合、つまり現実的な「神帝習合」の誕生なのである。習合であるから融通無碍で、現に日清日露の闘いに際どくも勝利を収めることとなる。大東亜戦争ではこの神帝習合が形骸化したために、惜しくも敗れたが。

そして戦後、ここでも日本は直ちに時代に順応したが、色々あった中で最大の危機の一つに、戦前の反動による左翼勢力の伸長があった。ところが日本は、自由主義の根幹を維持しながらも労働組合等の社会勢力を体よく体内に取り込むと言う、言わば肉を切らせて骨を抜く手法で無事にこれを回避した。実業家の邱永漢(きゅうえいかん)氏はこれに感心して「会社社会主義」と呼んだが、その実態は労使をここでも融合でなく使いわけの習合をさせた融通無碍で理屈無用の、「労使習合」と言うのが実態であろう。

更に下って現代、安倍さんですら「年功序列廃止」を口にしている。この呼びかけの狭義での本質は、「富の分配は生活給か能力給か」と言う問答に還元される。そしてこの問題は、一見経済問題に見えるものの、広義には今後の日本人の社会構造

瞑想録(その4)

にもかかわる問題である。米国式の効率万能経営が日本になじまないことは、小泉改革ですでに「逆証明」されているので、この問題は結局のところ、「子育て世代に篤くする」という「生能習合」で弾力的に落ち着くのではないかと予測している。

さて以上、日本人の強さの源を論じてきた。そのしなやかさと適応力の源泉は矛盾を懐深く包み込む習合の心構えである。帝国主義植民地時代に於いて植民化されなかったのは、日本とタイ王国のみだった。フィリピンなどはアジアの真ん中にありながら、キリスト教に節操もなく取られてしまった。そして呉善花(オ・ソンファ)さんとか石平(シー・ビン)さんとか、今はアジア根性を無くしている隣国から日本に帰化した人々は、日本人以上にこのアジアの母であるアニミズムの心を知り、いまだにその心を大切にしている日本に魂の故郷を感じたようだ。「おもてなし」の心も根っこは同一である。

隣国からのイデオロギー攻勢がうるさいが、これに正当な反論はするのは当然としても、もし彼らに巻き込まれてイデオロギー化して、習合とアニミズムと武士道の心を忘れたならば、それこそ敵の思うつぼであり、日本の敗北と滅亡である。愚かな一神教への宗旨替えと同値だ。言挙げをしない敷島の大和の国、この国の「まほろば」の心を大切にしていこうではないか。

11、マクロ歴史とミクロ歴史

経済学にマクロ経済とミクロ経済があるのは多くの人の知るところである。ミクロ経済は個人の消費動向を明らかにする分野で、代表的には需要供給曲線とか限界代替率とかである。基本的に需要と供給のそれぞれを座標軸とする2次元空間上の、線形・非線形の特性曲線の交点としての解と、その解のパラメータ依存性、場合によってはカオスのありようを調べる学問であって、問題は解析学に置き換えられる。

他方マクロ経済は集団としてのあるいは市場規模の消費動向を解明する分野で、代表的には公定歩合、株価、流動性、為替レート、投機と格付け、銘柄等である。こちらは変動の主要因が集団心理とか政治の動向とかなので、単純な解析学では扱えず、各種統計データを基にアナリストが预言する形を取る。ちなみに、マクロとミクロがあるのなら「メゾ経済」という分野もあって良さそうなものだが、これは聞いたことがない。統計学と同じで、個の小数自由度でもなければ大数の法則が効くほどの大スケールでもない「宙ぶらりんな」系は、自然科学でもそうだが、理論と言う指標が立ちにくく、解析しにくいのだ。

さて、このように常識的に確立しているミクロ経済とマクロ経済だが、どうしてマクロ経

瞑想録(その4)

済がミクロ経済の単純和あるいはそれらの統計(相関係数と有意水準とか)にならないのだろうか。それは、経済と言う行為あるいは集合が集合の元、つまりその構成員たる各個人の単なる単純和ではなく、むしろ相互作用が強くあって、マクロレベルになると各元の行為よりも相互作用の方が遥かに大きくなってしまふからだ。この当たり前のことが、特に欧米系一神教の単純思考の人たちの、「集合は元の集まりである」と言う素朴な信仰に実は風穴を開けているのだが、不思議なことにこの風穴に彼らは誰も気付いていない。

私は以前から基本的な視点として、欧米一神教の点集合モデルよりも、東洋多神教系の連続体(マス、塊で把握する)モデルを提唱しているが、連続体の視点では当然に相互作用が出てくるので、マクロとミクロの質的違いは全く意外でなくて、むしろ当然だ。そしてその上で物事の推移は、相互作用に舵を取られてダッチロールする訳ではなく、むしろ多分に(あくまでも蓋然的に)、あたかも大数の法則ごとくに「往々にして遅かれ早かれ似た道を辿りやすい」と言う、「蓋然確定法則」を提案してきた。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/pub/polytheism3.pdf>

物事を、塊である構成要素のせめぎ合いと見るならば、マクロがミクロの単純和ではありえないと言う「質的な違い」は、経済に限らずあらゆる分野に及ぶ普遍的なことなのだ。連続体論は点集合論に比べて複雑な分だけ、きれいな理論は出にくいかもしれないが、理論のために現実を見る目が偏るとしたら、それこそ本末転倒である。

歴史に例を挙げよう。マクロ歴史(世界、民族)とミクロ歴史(個人)の関係である。「歴史を動かすのは個人か集団か」と言う大きな問いへの答えでもある。

第1例として、もしマルクスが誕生しなくても、遅かれ早かれ共産主義は提案されたと思う。これは歴史を概観した上での瞑想手に依る結論だが、それでも敢えて理由を挙げるならば、当時既に資本主義の発達とその弊害としての労使対立は結構目立っていたこと、それに当時科学で分子運動論が発展途上にありこの描像が人間模様にも適用可能なことに思い至るのはさほど困難ではなかったこと、が挙げられる。

第2例として、アインシュタインが誕生しなくても、相対論は遅かれ早かれ提案されていただろう。電磁気学が既に相対論を予言する位置にあったからである。ただこれらの結論はあくまでも蓋然的だから、直観として賛成できない人が居てもそれは当然だ。

もしすべてが必然だと言うのならそれは、科学の中でも量子力学以前の古典力学の世界を演じていることであり、また、絶対再現性を振りまわすのならそれは従来の科

瞑想録(その4)

学の手続きだと言うことになるが、上記の蓋然確定法則は科学ではない。あくまでも勘や知恵や瞑想の結果としての知恵である。また、世の中の全てが統計効果であって個人の才能は歴史に一切影響を与えないことするのならこれは、マルクスと同じほどに断定的独断的一面的である。

と言う訳で今度は逆に、個人の才覚が歴史の分岐点で大きく働いたと思われる例を挙げよう。マルクス史観への反例である。もっともレーニンの誕生自体もマルクス史観への反例と言えるが。

最初の例は徳川家康だ。彼は弱小土豪の嫡男と言う微妙な立場に生まれながらその才覚でのし上がり、秀吉亡きあとは浅はかな淀の裏をかいて盟友を集め、最後は下馬評では「それでもまだ不利」と言われていた関ヶ原の戦いに策謀で勝利して、天下を統一した。一重に彼の才覚である。もし家康がもう少し愚直であったなら、あるいは淀がもう少し、ヒラリーほどに小利口であったら、家康はもとより誰も日本を統一できなかっただろう。そして統一されないまま時代が下ったなら、諸侯の中には自己の得のためにキリスト教や西欧列強と手を組むものも現れただろう。とすれば日本はおそらく西欧勢力にまんまと食い入られて植民地化され、日本人は全員キリスト教に改宗されていただろう。そうすると日本は世界に謙遜と美德を発信することができなくなり、その結果人類は早晩、思想的に行き詰って共倒れになっていたことだろう。この様は、フィリピンがまとめてキリスト教の手中に落ちて植民地化されたことに鑑みれば、納得できるはずだ。

もう一つ別種の例を挙げよう。マルクスの共産主義はその本当らしさと分かりやすさ、それに巧妙な夢の販売で世界の半分を手中に収めたが、その結果は自由の無い独裁と言う、悪夢以上の悲惨であった。ここでもし、共産主義の正しい側面は認めながらも、「労働者の勝利でことは終わらずに、その後労働者の内にヒエラルキーが形成され、それが特権階級となって、建前が平等なためになおのこと陰湿な恐怖政治に陥る」ことを事前に見抜いて当時の知識階級を警告し納得させるほどの天才がもし生まれていたとしよう。そうすれば今日までにあったような、共産主義国家で延べ1千万人を越える犠牲者を生むこともなかったのではないか。

家康の例は「生まれて良かった」例であるが、こちらは「生まれなくて残念な」例である。どちらもあり得る。なお、繰り返すが、これらの「結論」はあくまでも蓋然であって、反論はあって当然である。私の以上の議論は、自分では正しいと信じることを記したものの、実際には議論の種を供給した方に価値があるのかもしれない。

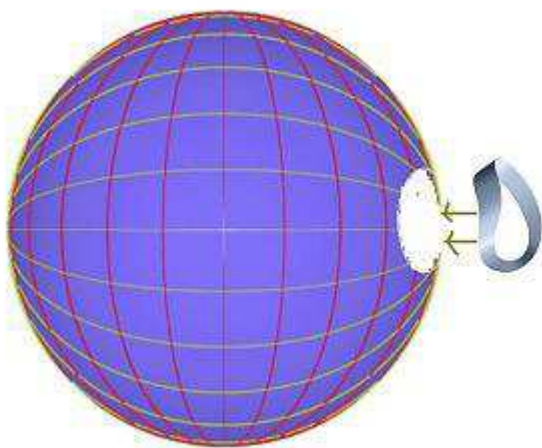
瞑想録(その4)

身近な例をもう1つ挙げたい。インターネットの発明は「第2のグーテンベルク」と言って過言ではないが、その基礎となるパケット通信方式、これはCERN(欧州核物理研究機構)の職員が、効率良く大量のデータを送信する方式として開発したものである。その基本的考え方は、従来の通信は電話等に見られるように回線占有方式だったところ、これを「情報を小荷物に分けて自由流通させる」ようにしたものだ。つまり本業の核研究とは直接関係がなく、もっと早くに誰か別の技術者が思いついても、おかしくなかった技術だ。もし誰か、例えばジョブズ氏みたいな人がもっと早くに想起していれば、情報革命はもっと早く来ただろうに。

最後に、この「ミクロ vs. マクロ」は心に関係のない物理の世界でもあるのではないかと予想している。「シュレディンガーの猫のパラドックス」と言う逆理がある。これに基づく「ミクロの量子力学だから非常識が許される」と言うファンタジーの余地が無くなってしまうことになる。ミクロからマクロに判で押したバカ正直な現実的表出が必ず存在するからだ。ここでもし、「物理でもマクロはミクロの単純和以上である」とするならば、この「タイ焼き効果」は否定される。もちろん「蓋然的に」であるから必ずではないが。少なくとも思考実験としては、こう言う思考実験は有って良いのではとも思う。

今の人類は「相互作用を捨てる」と言う理想化と引き換えに得た「壮大な理論の構築」に酔っている。理想的理論は頭の体操になって結構なのかもしれないが、実はここから人類の思想的危機が始まっているのかもしれない。

12、理解→想像→決断



(第1部)位相の反転

瞑想録(その4)

(注)「第1部」はややマニアックな内容なので、退屈な人は飛ばして、第2部に直接進んで下さい。

先日見たように、古典論理ではありえないが情理レベルでは、「矛盾の両立」つまり論述とその逆が同時に共存すると言ったことがありえる。例えば「ゆっくり急げ」のような「意味的矛盾」である。古典論理ではありえないと言ったことは「点集合 & 完全論理」の世界ではありえないと言ったことだが、では「連続体(マス、塊) & 蓋然論理」の世界では、具体的にどのようにして矛盾の体現化があり得るのだろうか。

連続体の特徴は、物の基本が連続体であって、点と異なり「幅」あるいは「広がり」を持つということだ。広がりがあるからその特徴は単調でなく、自然と多面的になる。更に広がり方も多様なことから同じところに複数の連続体が多重にある(多重性)ことになる。連続体理解のキーワードとして以前から指摘している「無限個のタグ」も、これらの多面性と多重性の性質からきている。そしてこの多面多重の性質より、一つの連続体から互いに矛盾の意味を持つ複数のタグが、同時に別途立つこともできるわけだ。この互いに矛盾するタグが複数同時に立ち得る、これが連続体特有の矛盾を許容する構造である。

では、「点集合 & 完全論理」ではどうしてこの多重構造が許されなくなってしまうのか。この点の構造は、連続体構造から見れば、その広さを絞り切った「極限」と見ることが出来る。そして極限に至るともはや幅が無いから、「無限個のタグ」「多面性」「多重性」、これらはすべて完全に押しつぶされて、雲散霧消してしまう。一点の上には「ただ一つの合理的な性質しか乗れない」のだ。こうして古典論理では矛盾は消滅しなければならない。

メビウスの帯という帯がある(上の図の右側)。ハチマキを半回転させてつなげると出来る。この帯は表裏がない不思議な帯であるが、同時に「縁が1本しかない」という特徴もある。普通の鉢巻きなら縁は2本だろう。そして縁が1本と言うことは球面(上の図の左側)に小さな穴をあけてそこに張り付けられるということだ。どちらも縁が1本だからだ。もちろん貼り付けを実行するにはメビウスの帯を大きくねじらないといけないし、実際は我々の3次元ではできなくて、あたかもクラインの壺のようになるのだが、とりあえずそうすれば強引にはまる。そしてこうしてはめてみると出来上がった言わば「イボ付き球面」は元の球面と、イボの分だけ位相が異なる。つまりどう変形しても互いに重ねられなくて、その本質が異なる。

瞑想録(その4)

ところがこのイボ付き球面のイボの部分を強引に1点に潰してしまうと、先のメビウスのねじれの部分が解消して、結局元の球面に退化してしまう。つまり「変わった位相」が反転して退化してしまうのだ。そして先に挙げた、「連続体上の多面なタグを1点に押しつぶす」時も同様の位相の反転・退化に依って、もはや矛盾を許容する余地の無い退屈で頑固なものになる。つまり矛盾を許さない古典論理になり下がってしまうのだ。

(第2部)理解→想像→決断

まとめると、矛盾も許し情理も許す懐の広い物の見方、つまり人工世界でなく現実世界をありのままに理解する行為は、連続体(マス)の視点で初めて可能なのだ。広がりがあり周囲連関があるからこそ、「理解」と言う心的で脳的な行為が可能になる。「理解とは何か」、これは良く聞かれる問いであるが本記事ではこれを、「一連の事態を、モチーフを中心としたまとまりのある連続体として、心の空間内に適切に位置づけられること」と答えたい。

良く、「理解はその人がそれまでに保有する経験や知見に照らし合わせてその位置決めができること」と言われるが、今私が提示した理解の定義に合致しさえすれば、別に論理(形式)であろうとビジュアル(具体的な絵)であろうと等しく理解できるし、また全く初めてで一見およそ見当がつかない様なものでも人はそれなりに理解出来たりする。また仮に人が対象に矛盾や誤謬を見つけても、人は「矛盾あり」「誤謬あり」と言う仕方で理解をする。

もちろんここで、「では人はそのモチーフをどう理解するのか」と言う更問が出るかもしれない。ここでは、「モチーフとは一貫した立ち位置のようなもの」であって、「直観によって反応する」と答えておこう。すると更問で、「人はどうやって一貫を感じるのか」と問われてしまい、切りがないことになる。実は「どこかがねじけている」と「一貫していない」の境界、これほど素朴になると、連続体よろしくその境目は多分にあいまいなのだ。

結局は「脳の直観によって」となり、直観の更なる理解は脳科学の世界に入るので、およそ思念の及ぶところでない。いずれにしても更なる大元は満足と安心、その更に大元は自己防衛保存本能だ。この時点で人間の本性に帰着するので、議論の連鎖を打ち切れる。この詳細については、別途後にもっと詳しく展望したい。

瞑想録(その4)

なお、意味理解や自我や感情には連続体つまりアナログの視点が必須だから、現行のデジタル計算機は、どれだけ進歩しても意思表示や決断は原理的に不可能だ。近似的行為ならあるいは可能かもしれないが、それでも意志や感情は伴えない。

さて、こうして理解の構造をある程度掘り下げたが、理解の次には何が来るのだろうか。決断であろうか。もちろん理解は決断に至る第一歩だが、理解と決断の間に「気付く」と「想像する」と言う2つの時点があると敢えて分解してみた方が、議論や解析は多産になる。ここで理解とは与えられた前提を基にその全貌を位置づけることであるところ、気付くとは安易には理解に至れないような微弱な信号を敢えて深掘りして認識することである。また想像するとは現状理解の上に立って次の複数の行動オプションを、「仮にそのオプションを取ったら状況はどうなるか」とイメージ予測してみることである。

そして取り得る複数のオプションの行く末が見えてくると、「ではそのうちどれが自分にとって一番幸せか」を、原則比較不能な(工学的に言えば単位が異なる)物の間で、「どちらが幸せか」と言う物差しに沿って、つまり連続体のタグのうちの「幸せ」と言う側面同士のすり合わせによって、決断することができることになる。特に「幸せ」、これは「自由」と並んでおよそ人の最高の規範であり、大元に帰れば人の自己防衛保存本能の最も基本的かつ重要な表出である。ちなみに想像が高じたものに妄想があるが、これが実に文学等芸術の出発点であって、無駄どころか人を人であらしめる極めて重要な能力である。

(本日のまとめ)

本日の議論をまとめると:

人の選択行為は「理解→想像→決断」の順番であって、いずれも連続体(マス)思考で初めて理解実行できる行為である。特にデジタル計算機は感情を持たない。

13、ストリートビューから学ぶこと

数年前にグーグルが「ストリートビュー」という機能を提供した。グーグルマップに付随の機能で、地図上で主要道をクリックすると、その道沿いの両側の景色がリアルに、店の名前はもちろんのことたまたまそこを通りかかった人の顔や車のナンバーすらも見えてしまうほどの「優れもの」だった。私もウォーキングに行くときなど事前に閲覧して、主要なスポットを落とさないようにしている。

瞑想録(その4)

ところがこの優れもの、技術的にはどうしようもない最低のローテクで、ひたすら人海戦術、道を車で走りまわっては写真を撮りまくるのみである。当然ながらそのデータ量は膨大になり、その膨大な記憶装置の開発にはかなりの技術の積み重ねがあって実現したことであろうが、そう言う裏話はともかく、応用物としてのストリートビューは、これ以上はないであろう壮大なバカチョンとドスコイの集積物なのだ。

学校や大学では先生や教授によく「力でなく頭を使え」と指導される。しかしストリートビューは対極に、人の知恵をあざ笑うかのようにバカの塊で、しかも皮肉なことにバカだからこそ使える。なぜかと言うと「頭を使う」と言うことは、何らかの理論や法則を見出して、それを使うことによりスマートに事を仕上げるのを意味するものであるから、スマートとは何らかの「理想化による情報の切り捨てや圧縮をする」と言うことで、これではどうしても現実からかい離する部分が出てきて、リアリティとしては不純になるからだ。学問とは「当たり前のことを大騒ぎして証明する手続き」と揶揄されるものだが、他方で小室直樹による「田中角栄の無罪の証明」とか白川静の「孔子私生児説」のように、イデオロギーに過ぎることによる常識外れもしてしまうのだ。

最近ソニーやパナソニックと言った技術の高い優良企業が、後進国の追い上げ等で業績芳しからず、人員整理やせっかく培った技術の取捨選択を行っている。もったいないことではあるが、なぜこれらのハイテク会社が傾いたかと言うと、それは「下らない物ほど最後はドスコイ力がある」という「ローテク上位の法則」を忘れて、いたずらに学問的香りの高いハイテクに走ったからである。現にローテク(ボイラーとか船とか電車とか)に回帰した、東芝、日立製作所、三菱重工の3重電は、業績をV字回復させている。

ハイテクは端的に言えば、部屋一つあればできるのだ。例えばハイテクの最先端である超電導、この新物質を発見するには究極には、すり鉢、電熱器(焼結器)、そしてバキューム(ドラフト)の3つがあれば、個人単位でも出来るのだ。知恵しか要らない、頭しか要らないからだ。それに対してローテクのドンガラ作り、船とか飛行機とか電車とか原発とかは、ローテクゆえにドスコイの物量と資本投資と大型重機がないと出来ない、言わば土方仕事だ。力の勝負だからだ。「人間最後はローテクだ」、故貴乃花親方始め苦労人は口をそろえてこう言う。

このローテク上位の原則、頭脳プレイでは最先端の数学や物理に於いてさえそうである。数学の基本は数字と演算だ。そして数字と演算のほとんどは現実世界では、お勘定を計算すると言った日常の小さな取引に使われる。そして具体的な数字のやりとりで特段の法則はない。おばさんAがスーパーでリンゴを買うのと、おばさんBが定食

瞑想録(その4)

屋でかつ丼を食う間に、法則の介在する余地などおよそない。まさにストリートビューの世界だ。そして数理科学の壮大な理論は、この現実世界に全く無力である。

なぜこのようにローテク上位の法則、つまり「現実世界のリアリティは法則化を拒絶する」と言う原則を強調するかと言うと、私は現行の科学を補完する新しい視点として、東洋思想やアニミズムに基づいた、「連続体と蓋然理論」を探索していて、その当初の目的の一つに、数字ではなくもっと質的情報も取り込める新しいアルゴリズムの探究も期待している。端的には「悟りのアルゴリズム」とか「アニミズムのアルゴリズム」とかだ。

だが、仮にそのような「より柔軟な」アルゴリズムが見つかったとしても、所詮は何らかの情報圧縮を伴うのだから、それをお勘定の計算のような日常事、具体的には生きた感情の分析とかアナログ的意味論の分析に使えるかと言うと、どうも当初の予定に反して使えないという気がしてきたのだ。

まず、個々の感情や意味の妙味はアルゴリズム化を拒否している。また、それらを総合して一定の法則や構造を導いたら、それはその法則や構造が元になった個々の例の、味わい深い細部の点を切り捨てると言う犠牲の上で始めてなし得ることなのだ。つまり物理や数学の統一理論と異なり、現実では「法則化や構造化が成立してもなお個々の事象の重要性は全く薄れない」という、イデオロギストが失念しやすい重要な真実がここにある。

まあ良く考えてみると、たやすく定式化できないからこそ東洋思想であり多神教でありアニミズムであるのだが、だからこそこれらの力を借りて従来の科学ではわざと避けていた部分を拾いたかったのだが、そしてそれは依然として可能であると信じているのだが、完全に拾い切れるかと問われるならば、「残念だけど最後の最後はストリートビューのローテクだ」と答えざるを得ない。

デジタル計算機全盛の現代にあって、皮肉なことにウイルスソフトはますます巧妙化して、将来は有効なワクチンソフトが追いつかない事態になるのではないかと危惧されている。あたかも危険ドラッグのような絶望的なたちごっこだ。そしてこのようなデジタルパニックに対抗するための最後の砦は、天才による超デジタルワクチンソフトの開発ではなく、実は古典的でローテクなアナログ機構の取り入れであると言う。たしかに「アナログウイルス」などと言うものは作れそうにない。ここでもバカほど、原始的なほど、ロバストで実用的なのだ。

瞑想録(その4)

私は先に述べた連続体の蓋然理論で、例えば茶器や絵画の美しさを何らかの指標化ができないかと願っている。茶器の形状は幾何学、その曲がり方は解析学なのだが、現行の数学理論はそういう方向に向かっていない。壮大な理論ができそうにないからだ。つまり数理科学が捨てている情報にこそ、その美の本質があるからだ。もし美を何らかで、言葉以外で表現できたら素晴らしい。茶碗の美なら何らかの蓋然法則がありそうだが、もちろん多少の情報取捨は防げないが。

それはあたかもストリートビューを基に「蓋然的な交差点のあり方」を抽出して交通安全に役立てるような行為、あるいは標準的交差点を基準に個々の交差点の特徴を解説するような行為、あるいはストリートビューの画像の裏によりディープな情報を貼り付けるような行為なのかもしれない。

14、いらっしゃいました！

店に入ると店員たちが元気よく「いらっしゃいませ♪」と歓迎の声をかけてくる。すると私はいつも、「いらっしゃいました！」と返すことにしている。この返事でなぜか店員たちも笑ってしまい、一気に緊張感が取れ距離感が縮まって、旧知のように親しくなれるのだ。実は私も笑えると分かっていて敢えてやっているのだが、真面目な話、なぜ受けるのだろうか？

「いらっしゃいました」、これは尊敬語だ。尊敬語を自分に使っていると言うことは、少なくとも形式上は偉ぶっていて、むしろ不興を買うはずのようにも思えるのだが、正しくは少なくとも「寄らせていただきます」とか「ちょっと失礼します」位だと思うのだが、なぜ自分を尊敬させて、つまり相手に謙譲を強いているのに、そこで出るのは親しみの笑いなのだろうか。人の感情と言うのは複雑なものだ。

ここでもし私が更に調子をこいて、「おい、その店員、パンコーナーに案内しろい」などと続けると、店員たちもおそらく顔がこわばってくるだろう。私が真剣に偉ぶり通すかに見えてくるからだ。つまり笑いのポイントはここにある。私が「いらっしゃいました！」と返す時、店員たちは私がおよそ本気だとは思えないから、そのちぐはぐ感で笑いが取れるのだ。もちろん単にちぐはぐではダメで、私がそこで「いらっしゃいました」と返す時、私は一瞬、常識のまるでないバカ殿あるいは天才バカボンの役割を演じたかのようになる。だから笑える。これはある意味の反語表現で、正面から「お世話になります」などと言うよりもよっぽど余韻があって、それで至上の働きをするのだ。

瞑想録(その4)

似たような例を挙げよう。5年ほど前にコメディアンそのまんま東が自民党から衆議院選挙への出馬を要請された際に、東が「私を自民党総裁にするなら」と言う条件を付けたことがあった。このニュースを聞いたほとんどの国民は「あの男がまたギャグのノリで冗談をかましたよ」と笑った。つまり毎度のように受けたのだ。ところがあくる日になって、彼の要求が本気だと判明すると、人々は呆れかえって「このバカたれの身の程知らずが」と怒った。ここにも笑いの本質が見える。大切なのは言葉の文字面そのものよりも置かれたシチュエーションなのだ。落差のあるちぐはぐ感と明白な非現実性で受け狙いと分かる、その安心感と知恵の入りようが、人々を笑いに誘う。そしてそれ以上悪乗りしてはいけない。そう言うモチーフで出来ている。

今私は「笑い」をテーマにしている。この笑いと言う感情、人の感情が最も顕著に出る局面であり、アナログ構造である脳の働きについての瞑想にちょうど良いのだが、実はこの笑いというものの、内容は極めて多岐に亘っていて、あの梅原猛先生ですら「とても一生かけても解明できない」とあきらめたテーマでもある。だから私も、あくまでもアナログ論の一部として典型的な形を探るのみとする。

次の例を挙げよう。実は昨今は「お笑いブーム」であり、漫才コンビが山ほど居て、ちょっとテレビを付ければお笑いの例の収集はたやすいのだが、次の例はマギー司郎にする。この人の本職は手品師である。だから人々は真剣なイリュージョンを見に、彼のショーにやってくる。ところが彼の十八番は、「縦縞のハンカチを横縞に変える」と言うもので、幼稚園レベルの子供だました。だから客は「金を返せ」と怒るのが相当と理屈では思えるところ、実際は笑いの渦だ。これも期待に反する落差であり、しかも司郎が自分をバカ扱いすることで受けている。加えて笑いと言うものは通常、1回目面白いだけで2回目以降は「またか」となってしまうところ、この人のハンカチ芸は堂に入っていて、何度見ても笑えてしまうから不思議だ。綾小路きみまろが年寄をバカにする毒舌をかましてその当の老人たちに受けてしまうのも、同様の「本気とは思えない軽いノリ」だからだろう。

少し違う例を挙げる。ある人が右足には下駄をそして左足には皮靴をはいていたら、これを見た人は大抵笑うよね。子供でもしない恥ずかしい間違いだからだ。あるいはある人が浴衣を着た上で足は皮靴をはいていたとしよう。これもそのちぐはぐ感で笑える。声の大きな人がうるさくほえる犬にほえ返して犬に「キャイン」と言わせたら、これは笑いを通り越してお見事かな。つまり笑いと言うのは非常に微妙なところにあって、その「幅」は意外と狭い。ちょっと雰囲気はずれただけで、「滑って」しまう。つまり全く受けなかったり、逆に怒らせてしまったり、あるいは感動させたりする。こう言った色々な感情の隙間に、笑いと言うものは位置しているのだ。

瞑想録(その4)

この脳空間上の極めて微妙な位置にある笑い、これを即興で返せるコメディアンたち、彼らの能力はすごいと思う。人はしばしばバカにするが、まさに人類のみに許された能力である。人以外で笑うのはせいぜいチンパンジーくらいだ。だから笑いを即興で出せる人は地アタマが良いと言える。学校の入試や就活面接で地アタマを見たかったら、数学のテストやSPIをやらせるよりも、笑いの応酬がどれだけ続くかで測った方がよっぽど当たると思うのだ。ダジャレは最もバカにされる下等で疲れる笑いだが、「英語でダジャレや冗談をやれ」と言われても、英語が相当に出来る人でもこれは難しい。

続いて最近の大笑いした例を挙げる。週刊誌ネタだが「吉田類は実は下戸だ」と言う記事を読んだ。吉田類さんは高視聴率番組の「酒場放浪記」のメインキャストを何年も務めている。そのしぐさからはおよそ演技とは思えないのだが、その彼を「実は下戸」という物語をでっちあげる智恵、この落差と気付きには私も舌を巻いた。5年前に自民党を離脱した長老たちが「立ち上がれ日本」と言う新党を作ったが、これも「立ち枯れ日本」と揶揄された。どの程度の知能の人が書いているのか知らないが、機転のきくユーモアのある人だ。週刊誌と言っても決してバカにできない……。

ダジャレの続きで、最後に難しい問題を指摘する。面白いことが言える人が必ずしも高学歴でないということだ。「成績は悪いが言うことは面白い」、逆に「成績は良いが言うことはつまらない」、こういう人たちは結構居る。「レベルの高い学校ほど先生に気のきいたあだ名をつけられる」訳ではないのだ。一体成績と笑いと、どっちが地アタマの指標なのだろう。ノーベル賞を取った田中耕一さんは、ドイツ語の成績がまるで駄目だったせいで大学院に進めなかったそうだが、これをどう捉えたら良いのだろう。ドイツ人なら子供だってできるような、地アタマ無縁の「科目」なのに。

本日はお笑いをテーマに話を進めたはずなのに、最後はちょっとシリアスな話題になってしまった。すみません。結局今日の結論は、落差と偉ぶった卑下と地アタマとセンスとすることで、笑う方にも笑われる方にも共通の感情空間分布が必要な、「ねじけていてニッチな連続体」と言うことでしょうか。

それでは、おあとがよろしいようで……。チャンチャン。

2015. 01. 04

15、ホーキング博士とハクション大魔王(人工知能と人類殲滅)

瞑想録(その4)

先日ホーキング博士が人工知能研究に関して、「重大な懸念」を表明した。ホーキング博士と言えばALSと言う、全身の筋肉が動かなくなる不治で進行性の病に侵されながらも、高度な数学的手法を用いての量子宇宙論を発展させた碩学で、特にブラックホールとその蒸発と消滅に関する理論で高名である。今や体はもとより声すら出せないほどで、意思伝達は徳洲会の徳田虎雄さんと同じく瞬きに頼っているが、その業績はいつノーベル賞を取ってもおかしくないと言われている。

そのホーキング博士が、「人工知能がそのまま発達するといつか自己再生産の段階に入り、その進歩は人の制御の及ぶところでなくなり、そしてついに人類を滅ぼすだろう」と警告した。冗談が言えるような人ではないので、少なくとも本人は本気でそう信じている、真面目な警告である。そしてもし当たっているならば、SF大作映画の「ターミネーター」を地で行く時代が待っていることになる。

これに対し各界の専門家も声明を発表したが、それらの声は賛成と反対が相半ばしている。賛成者の中には「私も以前から同様の警告をし続けてきた」と叫ぶ人たちがあり、反対者の大半は「所詮は機械に過ぎない」との反応である。果たしてどっちが当たるとのだろうか。どちらが当たるかで結果は大違い、これはあたかも、今は絶滅されたとする天然痘のウイルスを、「万が一判断が間違ったときに直ちにワクチンを作れるように」と、テロの危機もあるところ厳重な警戒の下に世界で2か所だけ保存しているが、この是非を問うほど人類にとってクリティカルな問題である。

不肖私はと言うと、結論から言うならば、ホーキング博士に逆らって後者を支持している。たしかに昨今の人工知能の進展は驚異的である。先日チェス王に勝ったと思ったら、今日はもう、捨て駒や成金があつてよっぽど複雑な将棋の棋聖にも勝ってしまった。しかも人工知能は、自らルールを生成し自己に組み込むことができる。つまり自律学習ができるのだ。だからこの調子で行くならば、人工知能は自ら別の人工知能を設計し製作するところまで行ける。ここまではホーキング先生に賛成である。

だが人工知能は基本的に、デジタル計算機応用技術であり、現状のデジタルコンピューターでは、どんなにきめ細かくルールを設定しようともそのルールの内側でしか演算ができない。特に意思とか智恵とか感情とか自我と言った人に固有の、より人の先天的形質に近くかつデジタルな記述ができない行為は高々近似までで、本質的な意味理解は原理的に不可能だ。だから人工知能が自ら発起して、「人類を絶滅させたい」などと言うマクロな目標を思いつき、かつこれを遂行することは不可能であると考え。先に言及した「自律学習」も、人が何を学習するかを決め、多数の問題と正解の組を人が与えることに依って出来ているのだ。

瞑想録(その4)

例を挙げよう。平面が仕切り線で2つに分けられている。「この平面の仕切り線の別の側にある2点を結びなさい」と言う命題を人工知能に与えたとする。すると人工知能の答えは「不可能」になる。ところが人なら「その仕切り線をちょっと持ち上げればよいだろう」と、別次元の気付きに至れる。こう言うことが人工知能にはできない。あらかじめルールとして与えられていないからである。あるいは初めての人に会った時に人なら、「この人何か嫌な感じだな」などと素朴に観じて避けようとするが、こう言う「素朴な感じ」が人工知能にはできない。何らかの事象に遭遇して、「このまま行ったら自分が危ない」とルールなく自ら認識して、自己保存行動に出ることも難しい。だから「人を絶滅させたい」などと発案し、しかも途中でダッチロールすることなくこのマクロ命令を最後までやってのけるなどと言うことはおよそ考えられない。

ただし人、特に悪意を持った人、例えばテロ集団とかならず者国家とかが、敵を殲滅しようと、殲滅させるようなルールをことさらに組み入れることにより、あるいは人工知能に定期的に指示することに依って、結果的に、つまり人工知能自体は何をさせられているのかのことの重大さを理解しないままに、そのテロのほう助をすることはできる。つまり人工知能はターミネーターよりも核武装に近い。核武装もそれ自体に意思はないものの高度の殺傷機能を持ち、基本的に性能と使い方次第で善にも悪にもなる。ならず者国家が核武装をより良い道具とするために、日々改良を重ね世界が開発合戦を繰り広げているが、これと同じことは起こり得る。つまり近い将来、人工知能を用いて敵国のシステム破壊を行い、敵国を混乱させてせん滅を測ろうとする、核戦争ならぬ人工知能戦争は勃発するだろう。実際先日北が米国にサイバー攻撃を仕掛けた。

サイバー攻撃の進化形としての人工知能攻撃では、より性能の高い人工知能を開発した側が善悪に限らず勝つのだ。その善悪は人工知能そのものではなく、所有者の目的次第である。この意味で人工知能は「ハクション大魔王」なのだ。ハクション大魔王は「アラジンと魔法のランプ」をヒントに創作された竜の子プロの漫画で、オープニングテーマは「くしゃみ一つで呼ばれたからは、それが私のご主人さまよ♪」という訳だ。大きな力を持っているが自分の自由には使えなくて、悪人にくしゃみをされるとその悪人の指示に従わないといけな。漫画では悪と言っても「宿題を代わりにやれ」とか「ガキ大将を転ばしてこい」と言った程度であって、大魔王も遊び心があるので片棒を担いで実行していたりした。

ところがその最終回だったかその前だったか、大魔王は本当の悪人、ヤクザに呼び出されてしまう。そして最初は言われたとおりにやっていたが、どうしても自らの良心

瞑想録(その4)

に逆らうことができなくなって、「私は壺に戻れなくても良い、だからあえて言う、あなた方のやっていることは悪いことだ、もうやめなさい、そして私はもうあなた方の言うことは聞かない」と死ぬ気で宣言して、そして大々魔王から返って特別に、称賛と壺に戻る権利を与えられる。

さて、ハクション大魔王の時は「人」としての素朴な良心の呵責が働いて、全ては善の方に収まったが、今問題としている人工知能の場合はどうであろうか。人工知能には本能とか遺伝的形質と言ったものはない。ルールはプログラムの言わばアプリレベルであって、その下にミドルソフトや基本ソフトがあり、これらが電子回路としての計算機を制御しているのだが、このどのレベルにも「良心」のような部分はない。あくまでも「オン・オフ信号」の膨大な集積なのだ。だから核武装に良心がないように、人工知能に良心の呵責を期待することはできない。

したがってホーキング博士が提案した課題については、「だから人工知能開発を途中で打ち切れ」でなく、逆に「だから悪に負けない人工知能の常なる向上と詐取の防止を図れ」と言うことになるのだと、私は考える。

16、やり放しの勧め

昔に「悪徳の勧め」と言う本を見つけて、中身は読みませんでしたが、当時まだ若かった私は、「不真面目な本だ」と真面目に思ったものです。そして今日の記事の題名は「やり放し(やりっぱなし)の勧め」、一見不真面目そうですが、極めてまじめな話です。

世の中では「やり放し＝悪いこと」と、図式が決まっています。理由は簡単で、皆が仕事をやり放したら天下御免、何でもありで、世の中の秩序も何も保てないし、経済発展も当然にないからです。警察もまじめに泥棒を捕まえないことになる。もっとも泥棒も盗みを途中で辞めてしまうかもしれません(笑)。

世の中なぜこれほどに勤勉を勧めて、やり放しを禁忌するのでしょうか。それにはやはり、今はなぜか世界標準である、キリスト教プロテスタントの「勤勉は善だ」と言う、つまらない教理にあります。そしてこの考え方が極端なのは、同時に「怠惰は悪だ」とも言っているからです。とにかく「唯一神(革命)のために馬車馬になって働け」、これは実は、キリスト教の開祖とされるイエスさんには遡りません。実は、低能で極端で性格破綻者の使徒パウロの、非常識な性格に由来しています。ですからイエスさんとはともかくキリスト教嫌いな私など、ますますやり放しを進め、かつ自らも実践しています。

瞑想録(その4)

日本にも二宮尊徳のような「真面目の神様」みたいな人は居ました。ただ他方で日本人は「中庸」と言うことを体で知っていたので、「真面目もほどほど」「やり遂げもほどほど」と言う、極めてヒューマンフレンドリーな自然な態度で生きてきた訳です。大元には神道に結実したアニミズムの心があります。そこに「ちょっとでも手を抜く奴は大悪人だ」と言う極端な道徳が、明治維新や開国とともに日本に土足で入って来ました。そして現代人は無意識のうちに、24時間回り続けるルームランナーに追いかけられるかのように、亡霊に取りつかれたがごとくに、「やり遂げ」に滅私奉公しています。

そしてそんな馬車馬のような彼らから見えてきたこと、それは「こういう心構えの連中からは新しい文化などおよそ出る訳がない」と言う、ある意味驚愕すべき事実でした。そうでしょう、歯車が新文化などおよそ作れる訳がありません。歯車(革命の細胞)はあくまでも使い捨て、「同じ仕事を繰り返させて壊れたら捨てられる」、ただそれだけです。楽しい人生ですね。

ところが他方で、日本にもこう言うつまらない人生を歩まなかった人たちが居ました。と言うか、彼らほどになると性格が違いつ能力があり過ぎて、「おまっとうな」人生などしたくてもできなかったのです。昔だったら「最後の無頼漢」と呼ばれた壇一雄とか、柔道家と言うより「元祖総合格闘家」と呼ぶべき姿三四郎こと西郷四郎などです。いずれもウィキペディアに乗るほどの著名人で、著名人であると言うことはそれなりの成果があるということなのですが、彼らの「成果」とは、「私の履歴書」に赤ん坊のころからの写真入りで自叙伝を書くような、そんな老成したガキみたものではなく、一言で言えば思いつきの行き当たりばったりで、まさにやり放しであるわけです。

そして彼らの人生、行き当たりばったりと言うとダメ人間に聞こえますが、そしてある意味本当にダメ人間だったのですが、全くの出たとこ勝負と言うよりも、心の中にとてつもなく大きな魂を有していて、その魂の赴くままに人生を進んだと言うことです。もちろん常識と衝突したし、敵も多かったことでしょう。でも「魂の赴くまま」という意味では一貫していました。そして魂の赴きとは情熱でもありますから情熱の向くままに、やり遂げるなどと言うことは無縁でした。それにも拘らずと言うか、だからこそと言うか、彼らは多くの新しい生き方や新しい文化の芽を、結果として提案し続けてきました。そして「世の中は実に良く出来たものだ」と感心するのですが、彼らの「提案」の多くは、後の弟子たちによってより形を整えられて、人類の遺産になっています。

最近の人なら赤瀬川源平とかやしきタカジンとか、あるいは西村賢太とかネジメ正一とか、皆ぎらつく個性で常識などぶっ飛ばし、情熱の赴くままにやりたい放題で、でも

瞑想録(その4)

熱狂的なファンが居て、敵も多く失敗も多かったけどそこらの一流大出の会社員よりも何万倍も痛快な人生をして、世の中に新文化を提案してきました。もし彼らが「最後までやり遂げる」ようなお行儀のよい人たちだったら、これほど機関銃のように痛快打を繰り出せたでしょうか。せいぜいどこかの大学の権威のセンセー程度の「予定された役割」をこなしたただけでしょう。

「人それぞれ」で「自分の人生は自分で選ぶ」、だからこそその自由主義で人間万歳と言う訳ですが、わたしなぞどうせ選ぶならやり放しの楽しくて納得できる人生を選びたいと思っています。ただ私には今列挙した人のように、自由な人生を裏から保証してくれる才能に恵まれませんでした。壇一雄の文才も、赤瀬川の画力も、西郷の運動力も、何もなかった訳です。それでも今なお、「やり放しこそわが人生」、そういう気概で日々生きています。赤瀬川さん流に言えば「やり放し力」、これのある人だけが高等遊民になる資格があります。お行儀のよい人は高等遊民を目指さないでください、単にエネルギーの浪費に終わりますから。

やり放し、大丈夫です。個人単位のマクロなやり放しには蓋然的に、これをフォローして形にしてくれる別の人が見えます。そしてその「別の人」は、他人の大きな提案を形にするのに長けた能力の持ち主ですから、やり放しの人はその人たちにライフワークを与えてもやっているのです。これが「マクロのやり放し」であって、トータルとしては最も業績と人類智が増強される方向になっています。つまりマクロの非効率が積み重なるとマクロの効率になっている訳です。

別の例ですが、著名な宗教学者の中沢新一先生は、チベットにわずか3年居ただけで、さも全部を理解したように「チベットのモーツァルト」を書いて、賞まで取りました。こういう態度は、一生をかけてチベット仏教を体得している人に失礼ではないでしょうか。あるいはそう言う面もあるかもしれませんが、中沢さんの目標は比較宗教や比較文化なので、一つの部門に長く居ても、責任は果たせるかもしれないが目標には至れないのです。

また、近年の有名人を訊ねると、小松左京の日本沈没も、マーガレット・ミッチェルの「風と共に去りぬ」も、いずれもやり放しであり、その証拠に彼らの死後に別の作家が「続編」を書いているし、彼らも生前に「続編を書きたいがまだ構想がまとまらなくて」と明言していました。もし彼らに「やり放しは不謹慎だ」と責めたら、あるいは彼らはしぶしぶ筆を取ったかもしれませんが、おそらく出来上がりは凡作あり、かつその犠牲で別の傑作が世に出ずに終わっていたことでしょう。そして私の瞑想も、これに似た行為だと思っています。

どうでしょうか、やり放しと言う、常識的には悪徳に象徴的に垣間見る、人類史の雄大な流れ。この自然さとダイナミックさは、アニミズムを知る人なら理解できるでしょう。校長とか学長程度に偉くなった教育者が良くのたまうセリフに、「人生振り返ってみると無駄なことなど1つもなかった」と言うのがあります。これを聞いた時に私は、「なんだ、お前の人生って無駄もないほどちっぽけな人生だったのかよ」と呆れます。どんどん無駄をしてやり放しましょう。自分のために、そして人類のために。

ちなみに私のこの一連のブログ記事も、好きなところだけのつまみ食いです。漫画「スヌーピー」に出てくる口うるさい女の子のルーシーが言うように「真面目にやっていたらそれだけで人生が終わってしまう」のです。もし一連の記事が成書だったら購入した読者に怒られるかもしれませんが、ブログと言う比較的自由な媒体のお陰で、結構好き勝手が書けて重宝しています。

17、ベネッセに見るマルクスの法則

岡山に本社を持つ代表的な地方優良企業のベネッセが、最近希望退職者を募るとともに社員の大規模配置転換を図ると発表した。出入り業者による個人情報の大量流出事件(防止対策の難しい悩ましい問題)をきっかけとした、大きな信用棄損と業績悪化が原因である。

それまでのベネッセは、主力の通信教育事業が少子化と競争激化によって業績が下がり気味だったとはいえ、当面は優良企業だった。また、岡山県に限らず地方都市に雇用が少ない中で、地方創成にも大いに貢献していた。中には田舎の岡山に帰りたくて敢えて入社した優秀な学生も居たことだろう。

それが最近の情報流出でこけたのをきっかけに、「経営者中のプロ」と言われながらも実は整理解雇のワンパターンしか能の無い、雇われ社長の原田泳幸のパフォーマンスの場と化してしまった。社員のうち何千人もが、畑の全く違う老人介護業に転換された上で岡山を去らねばなくなる。岡山に持家や実家のある人も多いだろうが、「嫌なら辞めなよ」と言う訳だ。自由主義は個人の自由と幸福の保障が理念であるところ、現実には逆の作用をしている。言わば「資本主義は自分の首を絞めることになる」状態なのだ。

これまでのベネッセは典型的なぬるま湯企業と言われていた。ここだけぬるま湯と言うのは平等の観点からは良くないのかもしれないが、でもなぜ直ちに、「だから労働強

瞑想録(その4)

化」とか「だから生活破壊」になるのだろうか。単に平等(アービトラージ)を保つためだったら、他の企業をもっとぬるま湯化したってこれも平等だろう。ところがそうはいかないのが自由主義競争経済社会なのだ。競争に勝つためには社員を絞り上げるしかない、社会がどんどん搾取強化の一方向的な非可逆過程を辿る、これが自由競争社会の悪い面であって、マルクスが予言した「資本を持たない労働者の疎外現象」の典型である。

ただ、マルクス自身はあくまでも利潤に注目して、余剰利潤の分配と言えれば数値化できる面に着目して、自由主義社会の罨とそれに対する彼なりの解決策を提起した。だから少なくとも形の上で彼の思想を引きずる労働組合は伝統的に、賃金には敏感でも個人の生活基盤にはあまり関心がない。しかしこの資本のための生活破壊は、数値化できないにしても労働者の疎外の見落とされた重要な一形態である。

おりしも今、安倍政権はアベノミクスと称して総合経済上昇策を遂行していて、その1項目に地方創成がある。地方創成がなぜ経済浮揚なのか、私には「価値観の多様化」は分かるのだが、多産による人口増や地方都市活性化に依る雇用増、これらがなぜ日本全体の経済浮揚になるのか今一分からない。あんな地縁血縁がうるさくて個人の自由がない所に人口増や雇用増が現実的だとはおよそ思えないし、こう言うことはむしろ都会でやった方が、シナジー効果が大きいとすら思う。

ただ他方で、「大それたことは望まないから生まれた所で楽しく暮らして死にたい」とか「スキーが好きだから雪国で暮らしたい」などと思っている人は意外と多い。しかも結構高学歴な人たちでもそうなのだ。こう言った人たちの希望が叶うための選択肢の拡大と言う意味なら、私は地方創成に大賛成である。自由主義の自由の尊重の基本は多様な選択肢にあるからだ。そしてこう言う種類の人々は、「自分より頭の悪い二代目に使われても良いから、住み慣れた地で楽しく人生を送りたい」と思っている。彼らはそのように自分の自由を行使したいのだ。だからこういう人たちにとって地方のぬるま湯は願ったりかなったりである。

それにも拘らず、個人の自由を最大限に保障するはずの自由主義・資本主義が、返って個人の生活を破壊して地方創成の芽をつぶすように仕向けている。これこそは大きな矛盾であり、まさにマルクスが指摘したかったことではないのか。なぜ自由主義がマクロ自由・ミクロ不自由のような結末となるのか、それに関しては数理経済学者のピケティが、「資本配分の速さが経済進歩の速さを上回ることによる」と分析している。要するに「自由主義は本能的に過度の競争をあおるし、しかもそれが善であるように洗脳する」と言うことであろう。

瞑想録(その4)

ただ残念なことに、ピケティは現象を見つけただけでそれを思想化していないので、こういう場面に応用が効かない。もし思想になれば、それに日本式アニミズムの中庸原理を対案としてぶつけて、人の幸せを習合させた自由主義経済もあるいは提案できよう。ピケティの成果についてついに加えれば、彼は解析の元になる基礎データ集めに10人の協力者が必要だった。つまりビッグデータ解析の一番のネックは解析断面の設定の仕方と言う知的作業ではなく、足でデータを拾い集めると言う地道なドスコイの人海戦術の部分だったのだ。これはビッグデータに普遍的側面であり、ここでもローテク優位の法則が働いている。

話を元に戻そう。自由主義と言えば分業だが、分業の端的なケースが、どこの会社にもあるので今さら誰も非人間的と感じないが、現業部門と経理部門の分離と相互監視である。現業は一々経理に制約を受けて白ける一方で、経理は強大な権限を有するが所詮は他人の金の管理だ。関係者全員がつまらなくなる、最低で非人間的な分業だ。そして自由主義の責任本位制の下では、あらゆる局面でこういう引き裂きが鉄則になっている。

一言で言えば、どんな主義も経済もシステムも、人を幸せにするためにあるのが本来や建前であるところ、主として欧米一神教の「人は神の奴隷である」という趣旨の非人間性や形式的ヒューマニズムによって、主客が転倒していると言うことだ。プロテスタントイズムはその宗教としての幼稚性あるいは低宗教性によって、個人の自由を中心とするヒューマニズムを育成すると言う、守旧を本質とする宗教ではおよそあり得ない「偉業」を成し遂げたが、それでも彼らができるのはせいぜいここまでであって、これより進歩させるには日本式の中庸原理と習合させる必要がある。

最近、やはりアベノミクスの後押しもあって、企業の海外進出が流行していて、まさに「猫も杓子も」の状態だ。だがここで海外とは、一昔前の欧米と違ってアジア等の後進国が中心であり、決してエリートの道ではない。要するに使い捨てだ。しかもそう言う後進国に購買力はないから、結局税金でむしられてできた円供与を海外で取り返すためにわざわざ海外赴任しているようなバカバカしい田舎芝居ものである。今の若者にはこんな道しか選択の余地がないのかと思うと、悲しくなってくる。

18、由井典子先生のこと

第1部:総括

由井先生のテーマ:「保型形式及びその一般化等、本来整数論的な不変量が、カラ

瞑想録(その4)

ビ・ヤウ多様体に対する生成関数や modularity に関する問題等に出現します。最終目標はラングランズ予想をミラー対称性として捉えることです。」(本人の紹介文より引用)

由井先生は日本では関係者の間にしか知られていないのかもしれませんが、英語のウィキペディアには先生の項目があるほどです。

http://en.wikipedia.org/wiki/Noriko_Yui

先生はまだ女性進出とかが言われていなかったころから、数学を極めるために渡米、渡欧して研さんを積み、今はカナダのクイーンズ大学の教授をしておられます。整数論から入ったようですが、果敢に層の厚い現代的テーマに突入して、今では数理論科学の中心分野をけん引しておられます。

私自身は由井先生と面識はないのですが、ちょっとしたきっかけで先生を知るに至り、

www.tsuda-jyuku.org/file/show/270

冒頭に転載した先生の研究テーマの大きさと素晴らしさに感動して、このメモをまとめたものです。

第2部：先生のテーマの自己流の解明

(注)第2部は基本的に自分の瞑想の基礎資料として作りましたが、マニアックな内容なので退屈な人は飛ばして下さい。なお、私はこの分野の専門家ではないので記載は厳密性に欠けた所があります。また、随所でウィキペディアのお世話になりました。

これまでの素粒子実験は、我々の宇宙が4次元時空であることをことごとく支持している。他方、素粒子を点でなく弦であるとする「弦理論」は、これまでに見出された素粒子を全て包括できる懐の深い理論であるものの、これに従うと「宇宙は十次元(複素5次元)である」という結論が導かれる。これら両者を理解する標準的な方法として、「余次元である6次元(複素3次元)がプランクレベルに丸まっている」とする見方がある。

そのような複素3次元のケーラー多様体として、カラビ・ヤウ多様体が有力視されている。多様体とは局所的には多次元平面である物が糊付けされた幾何図形のことである。カラビ・ヤウ多様体の定義はいくつかあって互いに同値であることが知られているが、分かりやすいのは「リッチ曲率がゼロとなるケーラー計量を持つ」と言うものだろう。計量とはその図形に与えられた物差しのことであり、その物差しを用いるとその空間の曲がり方が計算できるが、リッチスカラー曲率とはその曲がり方の代表値である。

瞑想録(その4)

それがゼロと言うことは、最も曲がりの少ない、言わば素直な幾何だと言うことだ。

1次元カラビ・ヤウ多様体は楕円曲線に、2次元はK3曲面にその表現を持つことが知られているが、弦理論のためには3次元の表現が欲しい。この分類はまだ完全に理解されつくされてはいないが、1つの方法として、モジュラリティーと言う概念に基づくアプローチがある。これによるとカラビ・ヤウは大きくリジッド型と非リジッド型に分けられ、かつリジッド型には少なくとも45種があることが知られており、他方非リジッド型についてはラングランズ予想により保型形式と何らかの関係を持つことが予想される。保型形式は整数論研究の有力な武器でもあり、ここで素粒子物理と整数論に何らかの関係があると言う可能性が出てきた。

また、カラビ・ヤウ多様体には「ミラー対称性」という際立った性質があることが、主として物理側から指摘されてきた。ここでミラー対称性とは通常想起する図形の対称性とは異なり、幾何学的には全く異なる図形でありながら、弦理論の先述した「隠れた次元」として扱うと等価になると言う図形のペアであるが、このペアから抽出された幾何学的諸量を相互に用いることによって、物理量の具体的算出が可能になるだけでなく、フィールズ賞受賞者のウィッテンによって定式化された位相的弦理論を通して、ミラー対称性ペア同士に重要な幾何的保存性があるとともに、数え上げ幾何学にも適用できることが分かり、数学者の注目するところとなった。

さて、先に触れた保型形式(オートモルフィック)だが、これはモジュラー形式の拡張であり、モジュラー形式とは整数のみを要素とする行列式の一定の集合で、元々は複素平面上の同型写像の研究を通して注目されたものであるが、これが繰り返しの性格を持つことから周期関数の拡張とも位置づけられ、しかも要素が全て整数であることから整数論解析の道具としても有用になっている。つまり複素多様体と整数論と言う一見別の対象を繋げる性格を有していることになる。そしてこれらの性質は保型形式に拡張されても維持されている。

この保型形式のカラビ・ヤウ多様体との関係で特に重要なのは、付随して不変量が存在することだ。不変量は物理でも数学でも決定的に重要である。保型形式が不変量を持つのは、保型形式が位相群(幾何であり代数であり解析でもある数学的对象でリー群の拡張)の幾何的特徴と関係するからだ。ただ、幾何と言っても初等幾何のイメージではなく、ホモトピー群等を使って代数的にその構造の指標を導出する形になる。

最後にラングランズ予想だが、これを一言で言うと、「ガロワ表現のゼータと保型表現

瞑想録(その4)

のゼータの間の双対性に関する壮大なプログラム」だそう。ただ、この予想に関しての分かりやすい記述が見つからなかったのも、このプログラムがなぜ壮大なのかは分からなかった。私には数学全体と言うよりは整数論周辺に限定された予想のように見えてしまうのだ。この原因としては、カラビ・ヤウ多様体への保型形式の作用を記した分かりやすい文献が見つからなかったことがある。強いて言えば「K3曲面の変形が保型形式のノルムになる」と言う文献があったが。なお、ゼータとはゼータ関数のことで、整数論を解析手法(無限級数和)に置き換える有力な数論解析手段である。

いずれにしてもラングランズ予想は現代の数理科学における最重要課題である。この予想自体は70年代初頭に出されたものだが、ここ20年ほどで、先生が言われるように素粒子論の最先端と結びつくことが分かって、再度多くの研究者の注目を集めるようになった。「ラングランズ予想をミラー対称性として捉える」とは、この予想の「双対性」とミラー対称性の「図形のペア」に何らかの対応があるということであろうか。もしそうならば、この対応の気付きは意外性があって面白いと思う。ラングランズ予想の周辺については今後さらに勉強していきたい。

19、論理理解の仕方

先日、数学者の由井先生の業績の周辺を自己流にまとめたが、これは自分自身を実験台に、「論理を理解する」と言う過程を観察するのが第一の目的であった。その理由は私には、「人の理解は第一義的に連続体的なビジュアルである」と言う現状の集約があり、もしそうであるとするならビジュアルが常にはない物をどう理解するかが謎になるからだ。以下にそのプロセスの自己観察結果を列挙してみる。多少マニアックなので、退屈な人は読み飛ばしてください。また、私はこの分野の専門家ではありません。由井先生の表明に現れるキーワードについて、何度か耳にしたことがある程度です。

・余次元が複素3次元→単に「 $10-4=6$ 」の引き算と、量子論の支配方程式に虚数が陽で出てくることから納得。ただし複素正則3次元など、およそビジュアルにイメージできない。

・カラビ・ヤウ多様体が有力視→リッチ平たんと言うことは「最も基本的で素直」と言うことなので、先ず素直なものから適応して特に問題がなければ続けると言う手順は物理学の常道であるとして理解。例えば強い力を統一するリー群が $U(3)$ でなく $SU(3)$ で済むのと同じ。

・素粒子論と整数論の深い関係→にわかには信じがたいが、特に整数論は数学の中では異端児的で余り統一的手法がなく、また連続体を実数の体として捉える観点から

瞑想録(その4)

は整数に何らの特権もないからだ。だが他方で、量子数が大抵整数であることや(シュレディンガーの方程式では整数以外の場合絶対発散)、フィールズ賞を受賞した物理学者のウィッテンがこの関係に早くから注目していること、また神秘学には「数秘術」と言う整数を特別視する瞑想法もあることから、もしこの両者に関係があれば面白いと感じた。

・ミラー対称性→具体例を挙げた文献が見つからなかったので具体的イメージは全くないが、「全く異なる幾何が多次元と言う限定された目的からは同じ役割をする」と言う現象は如何にもありそうに思えて、素直に納得した。ただし具体的イメージがないので自ら応用することはできない。もしこれが見えた気になればかなり楽しいのではないかと予想する。

・モジュラー形式が整数論的でありかつ周期関数の拡張であること→モジュラーの定義と、簡単な式変形で現にそうなるので、モジュラー関数の絵にかいたようなイメージはないものの、素直に納得した。まあ、ガンマ関数も変数が整数のときは階乗と言う整数的な積の周期的な関数になることのアナロジーも当たらずとも遠からずかもしれない。

・保型形式がモジュラー形式の拡張→どちらも複素上半平面のリーマン正則関数間の同型写像に基づいていると言うところで一応の納得。ただし保型関数についての断固としたイメージがある訳ではない。

・保型形式の不変量→具体的な文献を見つけられなかったので詳細は理解できていないが、周期関数の名残を持つなら、それは不変量に行きつく可能性はあると考えた。

・保型形式が位相群とも関係→複素リーマン曲面の同型写像を念頭に置くと、「さもあるかな」という感じ。ここのつながりが良く分かればラングランズ予想の大きさの理解にも近づくのだろう。位相群は解析でも幾何でもあるからだし、その特殊化のリー群は素粒子論の基本理論であるゲージ理論の主役だからだ。

・代数幾何は初等幾何とまるで違う→代数幾何は代数方程式の解空間で、その有理解の存在がそのまま整数論に繋がるが、三角形とか円とか補助線とか言うものでなく、多分に位相を見るような「大ざっぱ」な特徴を抽出する幾何である。位相的特性の抽出の究極的目標に不変量の発見があり、それが現代数理科学の大きな流れであることは承知しているが、私個人はむしろ、茶器の曲線美を愛でる方が好きだ。

・ゼータ関数→変数を乗数とする整数の逆数の無限級数和で、整数論を、より扱いやすい解析学に翻訳する数学的な道具。極めて強力なことは私も聞き及んでいるが、整数論の本丸の内ゼータに置き換えられるものは実は多くなくて、一定の癖と言うか偏りがあるような気がしている。まあ、数学は物を公平に見る道具では全く無くて、むしろ「多産でなければ数学でない」と言う、タコが自分の足を食って生き延びるところがあるのだが。

瞑想録(その4)

・双対性→ホモロジーとコホモロジーのような関係のアナロジーとして理解。ただ、表現同士が双対とは、そう言うこともあるのかなと言う程度。

さて、以上をまとめますと、ビジュアルがない、あるいは原理的にビジュアル化できない論理について「理解した気になる」とはどういうことでしょうか。ちなみに私はまだ圏論にピンと来ていないので、上記諸項目の私の理解が幼稚であるとは言いながら、その幼稚にも程度の違いがあることになります。

見出した答えとしては、①既に理解している論理の延長または応用、②抽象的とはいいながら類似関係の発見、③意外だけれどもだからこそ本当くさいと言う直感、④天下一式だけど何となく本当に聞こえるのでここは信じておこう、⑤まあ研究と言っても人のやることだからそれが普通だろうと言う常識、⑥何度も使ったり当てはめたりしているうちにだんだん慣れてきてついには分かった気になる、等が論理理解の深層として見えます。

一言で言えば、ビジュアルがあればそれに越したことはないが、なくてもそれなりに納得できてしまう、少なくとも「まるでちんぷんかんぷん」ではない時点があります。ただそれが右脳と左脳のどういう働きによっているか、あるいは連続体(マス理解)との関係でどう位置付けられるか、更には「ちんぷんかんぷんとちょっと分かった」の差はどこから来るのか等の根本的な問いには、もっと深い整理が必要です。

さらに私がなぜ由井先生の決意表明に感動したのかを省察します。感動は理解以上に動的な、心の意味論的働きだからです。自分なりに答えるならば、以前からそれなりに聞き及んでいた専門用語の、先生における組み合わせ方が、如何にも雄大に聞こえたと言うことです。例えばダライ・ラマに会ったとき、その偉大な人格に本能が反応しますよね。そんな感じですか。これもまだ十分な答えになっていないですね。

なお、数学と物理の境目と言うか役割分担を見ておきますと、専ら概念を用いた理論構築を行うのは数学、その構築された数学の中で、実験結果と合うものについてその具体的な意味する所や具体的な値を求めるのは物理、と言う仕切りになります。

最後に、なぜ私が数学を専攻しなかったかの自己分析を一言。数学は地道に一歩々々腰を据えて漏れなく理解していく、そう言う我慢強さと根気と気の長さが要るのですが、私はせっかちな性格で、大まかな点と線の繋がりさえ分かればさっさと次に

瞑想録(その4)

行きたい、気が散りやすく腰の座らない、良く言えば興味の幅がとても広い人間なので、「一所懸命」がおよそできなかったということです。

20、功利主義は善か

功利主義、哲学の難しい話は置いておいて、この記事で功利主義とは端的に、「得がないことはしない」と言う極めて明快でドライな生き方、仕事の仕方であるとしよう。まあ当たり前だろう、金にも喜びにもならない仕事をわざわざやるとか、ましてや他人の仕事を無意味に増やすような奴は、仕事をしない窓際族のオッサンよりも悪だ。言わば自己保存本能の極めて顕著な現れだ。功利主義は成功報酬主義や効率主義、あるいはシステム合理化や適正化と近い所にある。

これが徹底している米国では、営業マンの電話時間の長さを後ろでマネージャーがタイムウォッチで測っているなんて、日常茶飯事だ。もっとも根が怠け者の米国人のこと、実に良く出来ていて、マネージャーが不在の時はまるで別人のように仕事をしない。言わば彼らなりの保身だ。米国に於いては功利主義、つまり「労力以上の余禄がない仕事をするのはダメ人間だ」、これは徹底していて、たとえ親切や良心の発露であっても功利を外すと則ち軽蔑される。「清貧」などと言う発想はないのだ。ちょっとでも給料が良ければ即転籍、これができて米国では初めて尊敬される。

その結果米国では、優秀な人は下積みを経ずにいきなり管理になる。その結果、「現場を知らずに財務諸表しか見ていない」と言う欠点はあるものの、新規プロジェクトの企画立案能力は抜群だ。ただその代わりに、中間管理職や現場労働者は極めて質が悪い。「ロケット打ち上げに失敗した原因を調べたら、安定機器が上下逆さまに溶接されていた」などと言うようなことはざらだ。溶接員はもちろんのこと、監督も見逃していたのだ。その結果トータルとしての効率、つまりマクロ効率が落ちていることは否めない。

日本は逆に現場主義と称して、エリート候補でも最初は工場に配属されて、一歩々々昇進していく形を取る。一応「現場の経験も重要だ」と言う言い訳にはいるが、大抵の場合それよりはるかに長く現場におかれる。欧米式の功利主義の観点からはおよそベストでないし、実際に経験した私も何度も「バカらしい」とは思ったが、その「バカらしい」システムのお陰で現場の工場にも優秀な人材が配置されることにより、トータルで日本の最近までの成功モデルを形成していた。

瞑想録(その4)

効率主義はしばしば数値主義や結果主義とも結び付く。結果が全て、それも金が儲かるか否かが全てで、途中の真心とか運の良し悪しとかは一切無視される。だから欧米式経営法では多分に、自分の任期に成果を出すために、後先考えずに今に資本を集中する。例えば教育や技術開発は無視して全員を営業マンにしたりする。そして後継者は、前任者の悪口から仕事を始めると言う訳だ。日本でもサッカーチームの監督なんかは、かなりこの姿をしている。毎年半数が首になる。

だから少なくとも米国流の「目先の功利主義」「ミクロな功利主義」は日本的常識からはむしろ愚かであって最良でない。つまり日本では、「欧米式功利主義はダメだ」と言うことになる。現に頼まれなくても誉められなくても儲からなくても、町内会や地元の仕事を自発的にする無名の日本人は沢山いて、社会の潤滑油としてトータルとしての居心地の良さに貢献している。要するに功利主義も経済学と同様に、ミクロの単純積み上げがマクロにならないのだ。

だがしかし翻って、日本であっても功利は全く無視なのだろうか。例えば意味もなく壁に向かって独り言をしゃべり続けるのはどうだろうか。あるいは下らない世間体のためにやっとためた大金をただで呉れてやるのはどうだろうか。良い大人が呼ばれてもいないのに幼稚園生の輪に入ってお遊戯をやり続けるだろうか。愚痴しか言わないつまらない奴と延々と酒を酌み交わし続けるであろうか。いくら日本人がお人好しでも、こう言うことはしない。こう言うことに浪費される金と時間は、死に金であり死に時間だ。一言で言って「下らなすぎる」のだ。古典で見ても平家物語では、密議の最中に「瓶子が倒れたぞ」などとダジャレをかますバカ貴族は返って讒言された。つまり、人は誰でも広義の功利主義を考慮して生きているのであって、その功利の意味が東洋と西洋で違うだけなのだ。結論として功利主義は無条件に善である。

つまり、功利主義ほどマクロとミクロで異なるものも少ない。愚かを排し、下らないことに与せず、知恵を求め、常に大局を見る。矛盾に聞こえるかもしれないが、木も森もどっちも見。私はこの態度を「大保身」と呼んでいるが、目先の保身はともかく大保身ができないような人は生きる資格がない。世の偉人たち、イエスも釈迦も老子も孔子も、皆その生きざまはマクロ功利主義、大保身と呼んで良いだろう。不肖私も、大保身の無い人とは付き合わないようになっている。巻き込まれたくないからだ。

大保身を弁えた人とそうでない人の見分け方の一つに、「無用の用ができるか否か」がある。一見無用なことを無鉄砲に、しかし魂的には統一的なやり方で出来るか否か、あるいは豹変できるほどの君子であるか否かだ。人物の大きさが現れる。ここで一言注意したいが、無用の用と言う言葉は、無用が全て用になることを意味するのではな

瞑想録(その4)

い。「振り返ると人生無駄なことはなかった」などと平気で教訓を垂れるような人物は、大人(たいじん)もどき、あるいはニセ君子であって、似ていて非なるだけに余計にややこしくて紛らわしいが、この手の人物が実は一番ケツの穴が小さいのだ。もっとも本当に意味なく無駄の限りをしているのも明白な愚かであってここでも中庸が大切であり、結局は各人が経験を積んで本能的に見分けるしかない。

ひたすら無茶苦茶をする、役に立つなどどうでも良いから、渴した熱い魂でやりたいことをやり続ける、そう言うスケールの大きな人の中で智慧のある人が、仮にその人のしたことの半分以上が無駄だったとしても、実は一番効率が良く、つまり最も功利主義的な生き方をした人なのだ。ミクロな功利を低く見てマクロな功利を実践できる、こう言う人はそうそう居ない。例を挙げれば高僧でありながら酒も飲めば妾も持った、一休さんこと一休宗純などはこの例だろう。彼のお陰で今の日本仏教は形骸化しなくて済んだとまで言える。だからと言ってそこらの生臭坊主を正当化する訳ではないが。

大保身、大功利、こう言う言葉を並べるにつけ、人生に於いては実は、ミクロよりもマクロの方が、よっぽど大切ではないかと思えてしまう。一休さんの例で挙げたように、マクロは矛盾の巣窟である。世の中の真理は矛盾にあるからである。矛盾もできない人間は、結局何もできない。

21、構造主義と言う極端

人文科学は式で書けないので特に、主義主張の具体的内容とその時代変遷が、重要な学習項目になる。そして近代思想を大くくりで見ると、「実存主義→構造主義→ポスト構造主義」と言う流れがあると言われる。実存主義は「超主観」、構造主義は「超客観」、そしてポスト構造主義は「人の顔をした客観」と言う感じか。実存主義の旗手はフランスのサルトルで主要著書は「嘔吐」や、ドイツ人のカフカで「変身」、あるいは本人は否定しているがカミュで「異邦人」が挙げられる。他方構造主義は、言語学ではソシュール及びやや後期だがチョムスキー、精神分析学ではフロイトとユング、文化人類学ではレビストロース、数学ではブルバキ(集団)、建築ではやや前期だがル・コルビュジェと言ったところだ。マルクスや近代経済学にも構造主義的な側面が見える。

理系学問は統一理解を本旨としているので、ことさらに謳わなくてもそもそも構造主義的である。しかし「全て異なる」が基本で、式が適用できずひたすら叙述的に主張するしかない人文科学にも「一定の構造を見出そう」と言う方向、あるいは「見出せるのだ」と言う信念の立場が構造主義である。自己や物の存在の手ごたえを感覚的に感得す

瞑想録(その4)

る実存主義が先ず唱えられ、続いてこの「行きすぎた主観」をカウンターバランスする形で構造主義の流れとなり、そして行きすぎた抽象化や人間不在に対する反省から、構造も文脈でとらえようとするポスト構造主義に進んだ。ポスト構造主義はフーコー、デリダ、ドゥルーズ、ラカン等が代表格である。

構造主義のありようをブルバキで見てみよう。ブルバキは数学の構造を、代数構造、幾何構造、解析構造の3つから成るとした。例として代数構造から群(ぐん)を見る。例えば整数(1, 2, 3...)を特定の整数(例えば5)で割った余りは、0, 1, 2, 3, 4の5つだが、これらは群を成す(剰余群)。3+4は7で、5で割ると余り2だから「3+4=2」、同様にして「2-4=3」と言った感じだ。この「群」と言うものを構造主義的に表現すると、「ある集合内に演算が定義され、零元と逆元を常に有すること」と定義される。構造を余すことなく的確に述べているのだが、この一文で具体例なく群の概念にピンとくる人は、よっぽどの天才だ。ちなみに大学で理数系に進むと真っ先に習うこの群、数学専攻でも理解できずに卒業する学生がいるほどだと言う。

そして構造主義では例示は不純な具体化でしかない。なぜかと言うと、例示は全部を言い表していないだけでなく、かたわですらあるからだ。構造と例示は、貴金属(金)と卑金属(トタン)程にその品格が違う。先の剰余群だって、群の一面を表現しているが、決して全部ではない。「本当の群」は遥かに抽象的で多機能なのだ。この例からも分かるように、構造主義は人の素朴な感覚からすると、行きすぎて非人間的で、取り付くシマがない。文句を付けられない程に正しすぎて、食いつこうとしても食いつける隙がまるでない。

そしてこれは、構造主義の流れをくむ理論すべてに当てはまる「欠点」である。この欠点に対する反省として、また人文系の理論では構造化のために犠牲になって捨てられた部分にも重要な情報があるので復活させたいという事情から、ポスト構造主義が出現するのは自然な流れだろう。構造主義は、一度は現れなければならなかったが、一度現れてその極端さが知れば、以後は「実存主義と同様に極端な手続き」と言う正当な位置と価値を与えられて、以後も存続することになる。

さて、冒頭でも述べたように理系学問はそもそも構造主義的なのだが、特に際立つのは数学である。数学ほど得手不得手のはっきりした学問もない。不得手な人は小学校3年で習う分数の通分で、早くも落ちこぼれる。ましてや式の変形や三角関数、指数対数関数や微積分になるともう拒否反応だ。早稲田大学の文系学科を卒業して大学講師をやっている知り合いが居るが、この先生も通分はできない。また、今や一億総株投資時代で、横丁の八百屋や魚屋のおばさんまでが株をやっているが、これら

瞑想録(その4)

のおばさんたち、複雑な株式市場の泳ぎ方を知るほどに細かい経済指標の読み方をマスターしている割に、通分ができない。これは一体どういうことだろうか。

経済指標は、知識の量は膨大だが多分に個別事象であるのに対し、通分と言う操作は、対象となる分数の具体的な値によらず成り立つ手続きであるため、実は既に抽象化されていて、構造の一つなのだ。で、今上で見たように、構造はどうしても非人間的で冷たい側面を持ってしまう。存在が人間を突き放しているのだ。だからよっぽどその分野に素質を持った脳構造の人以外は、通分や微積分を理解しようとしても、食いつく隙なく跳ね返されてしまうと言う訳だ。

ただ、電卓が当然な今ならなおのこと、店番のおばさんも通分は知らなくても商売に困らない。競馬場が楽しみの中華屋のおじさんも、通分は知らなくても馬のオッズを評価するのに全く困らない。私は、「義務教育は隣の居酒屋まで公共交通機関で行って、注文して吞んで食ってしゃべって楽しんで、清算して帰宅できる程度で良い」との立場だが、居酒屋巡りをするおじさんたちも、通分ができなくても何ら困らない。これらの例は構造と言うものの非人間的冷たさを物語ると同時に、この構造と言うものが、「無いと生きられない」と言う種類の物でなく、むしろ芸術と同じで、高々世の中を潤す程度が役目の、言わば無用の代物であることも、同時に象徴している。一言で言えば構造主義と同じく、存在が極端なのだ。

もちろん通分ができる人や構造が理解できる人は、世の中で常に一定割合必要だ。そんな彼らが新しい薬品を開発して人の健康を守ったり、医者になって不治の病を治してくれたりする。電車を作るのも戦闘機を作って国防に寄与するのも、皆こう言う人たちだ。だから構造主義も回り回って人類の役には立っている、従ってポスト構造主義を生み出せばお払い箱と言う訳では決していないのだが、しかし「全員が理解しないといけない」と言う種類のものではない。むしろ最近では逆に、「理解できる特殊な人はそう言う特殊な部門で専門家として生きて下さい、会社経営や政治は私たちがやりますから」と言う、専門奴隸的な位置づけになってきている。

今太閤と言われ「コンピューター付きブルドーザー」と呼ばれた稀代の名宰相の田中角栄も、通分はダメだっただろう。初代太閤の豊臣秀吉がもし今生まれていたら、どの程度の学歴になったのだろうか。角栄と同じくらいかもしれない。だから、数学や構造が理解できない人たちよ、決して落ち込むことはない。もしかしたらあなたは、そんな数学や構造が理解できる人たちを顎で使う立場になるのかもしれないのだから。

22、ペナルティゲーム

交通や物流手段の驚異的な発達により、世界はますます一体化して密接に関係し、世界分業化がもう切り放せないところまで来ている。焼き鳥1つを見ても、餌は米国、金網の檻は中国、串は韓国、輸送燃料はサウジ、焼き炭は台湾、温度制御プログラムはインド等々、世界中の多くの国がからんでいる。ましてや何万個もの部品を組み込む自動車など、からんでいない国の方が少ないだろう。

こうして世界の高密度な分業化が進んだ結果、たとえそのどこかの国が、例えばその独裁者の横暴によって世界のルールを逸脱した行動を取っても、昔のようにたやすく縁切り(制裁)するとか、ましてや攻め滅ぼすなどと言うことはできなくなった。武器も核武装等高度化して、たとえローカルないざこざでも、そのどちらかが本気になれば、地球消滅の危機すらある。

この世界密結合の危険性を人類に象徴的に教えたのは、先の2回の世界大戦であった。ローカルな小競り合いが、互いに同盟を結んでいる他の国の参戦を招き、ついには世界規模になった。その第1次世界大戦から今年はちょうど100年目だが、この世界レベルの消耗戦を終結させたのは、国際連盟でも人道主義でも国際法の順守でもなくて、スペイン風邪の大流行であった。疫病のお陰でどの国も、とても戦争どころではなくなったのだ。

そして続くロシア革命、世界中の自由主義陣営はそのイデオロギー故に嫌悪して、自国への革命の飛び火を防ぐためにも、討伐の軍隊を派遣した。日本もシベリアに出兵している。つまりソビエト連邦のその当初は、革命には成功してもこれを承認する国などおおよそなく、世界からは孤立して、ちょうど今のイスラム国の様だったのだ。ところがそのソ連が、わずか10年後には世界に承認されることになる。イデオロギーが認知されたからではなく、ソ連だけが世界恐慌をうまく乗り越えて経済が順調だったために、自由主義諸国は意地を張っていられなくなってしまったためだ。背に腹は代えられないと言うか、経済力が武力ほどに物を言うことになった、象徴的な歴史的事象である。

そして現代、アジアでは中国が急速に台頭し、膨張政策で世界ルールを平然と無視している。これは主として、中国指導部が恐れるのは国内の革命であって外国の存在では全くなく、国民の目をそむけるためには周辺国の思惑などどうでも良いためだ。だがそうかと言って、自由主義の守護神たる米国は遠くのアジアまで得意の善意を行動で示す余裕がなく、何よりも米国の国債を一番買ってくれているのは実は中国だと言う痛い事情もあって、米国がアジアの同盟国にしてやれることは口による威嚇と示

瞑想録(その4)

威行動(プレゼンス)がせいぜいである。かつてお笑いの北野武(タケシ)が、「おじさんも怒ると怖いのだよ」と言うセリフで受けていたが、これと同じ程度であって、怖い顔をすること以上のことは金縛りで出来ない。

そんな世界密集合の中でロシアは昨年、ウクライナからクリミアを奪い取って併合した。そして「隴を取って蜀を望む」が如くに、ドネツク、ガネンツク両州まで取ろうとしている。どうしてこの密結合の時代にこのような蛮行ができてしまうのか。それはロシアのソ連時代からの老獪な政策があって、その集大成に過ぎないからだ。ソ連時代からロシアは、ロシア人を積極的に周辺の衛星国に移住させた。そしてクリミア等では実に人口の既に過半数がロシア人という構成になっていて、「住民の民意によって平和裏に」併合したと言う、さも民族自決のような巧妙な形を取ったのだ。トロイの木馬型コンピュータウイルスに似ている。

もちろん国連が反対声明を出したり、自由主義諸国は資産凍結の対抗措置を取ったりしたが、これらなど「タケシの怖い顔」程度で、全然致命的でない。ちなみに昨今ルーブルが下落しているが、これは別に自由主義諸国の団結の成果ではなく、スペイン風邪に同種の偶然に過ぎない。

このような、「雑音にすら世界が身動きの取れない」状態だが、これと全く同じ状態は30年前に既にあった。米ソ冷戦のさなか、この時ソ連の食糧事情は既に悪化していて、ソ連は米ソ穀物協定により天敵の米国から穀物を輸入していた。そして一時、米国は制裁措置としてこの協定の破棄を真剣に検討したが、出来なかった。理由は人道的なものでも何でもなくて、米国農民が輸出用に生産した穀物を輸出する先が他になくて、身動きが取れなかったからである。

世界には国際連合の他に国際法や各国協定と言ったルール順守のための仕組みはあるが、これらの役割は多分に道徳的かつ紳士的なものあって、実効力は無に近い。クリミアだって北方領土だって、ロシアが紳士面を辞めている以上、取り放題で終わるだろう。「ならず者国家と言われようがやった物勝ち」が、実は世界の実行ルールなのだ。そこには正義とか客観的歴史事実とかはほとんど無力である。韓国の仏像だって返ってこない。尖閣や竹島だって、「歴史云々の正当性があればいつか解決する」などと思っているのはお人好しの日本だけである。最終的には現代の武力である経済力と外交力と宣伝戦とケツまくり力で決まるのだ。

結局、特に最近の世界は、密結合と核武力によって本気の闘いが禁じ手となったために、怖い顔をしつつポイントを稼いだり無くしたりと言う、一種のゲームに化している。

瞑想録(その4)

大事なものはポイントあるいはメダルをいくつ持っているかで、ロシアはクリミアでペナルティを取られてポイントを少し減らしたが、世界政治には復元力があるので、怖い顔すら永遠にしていられずちょっと辛抱すればすぐに忘れられる、つまりポイントがお金と違っていつの間にか回復していると言うことを、プーチンを始め世界の英明な指導者たちは良く理解している。ペナルティだってゲームの内なのだ。

現代の世界政治は結局、あたかもポケモンやサッカーのように、ヒットポイントとダメージポイントをコソ泥とペナルティキックで取り合う、シーソーゲームなのだ。リアリティは有るようで無い。ただしゲームと言っても小ずるい「隠しコマンド」や「裏コマンド」が有りのゲームなのだ。また、サッカーと言っても、審判は見て見ないふりをし、見えなければ反則は平気の、ほとんどヤクザサッカーなのだ。

23、悟りと救い

とある駅前で、私がお寺の参禅会に参加するために通りかかると、キリスト教の宣教師に声をかけられた。

宣教師:あもう、ちょっと良いですか。

私:はあ、何でしょう。

宣教師:私はキリスト教の宣教師です。あなたに救いに来しました。

私:ああ、もう間に合っていますから。

宣教師:どうして話も聞かないうちから間に合っていると分かるのでしょうか。

私:屁理屈を言う人だなあ。手短(てみじか)にお願いします。

宣教師:イエスキリストこそあなたの救い主です。今すぐに信じなさい。

私:ちょっと今近所の寺に参禅に行くところなので、また後にします。

宣教師:そこでは何ををするのですか。

私:だから2時間ほど座るのですよ。

宣教師:良い大人が昼間に2時間もただ座るだけえええ？仕事をしなさい。

私:余計な御世話だな。さようなら。

宣教師:あなたは今すぐ生まれ変われます。もう座らなくてもよいのです。

私:私は座りたいのですよ。そして悟りを得たい。

宣教師:悟りいい？大切なのは悟りでなくて救いです。今すぐイエス様の命に預かりなさい。イエス様は復活されて、あなたを待っています。イエス様はあなたの救い主です。

私:はあ？私はそのイエスさんなんて言う人は知らないし、何も頼んでないのですよ。あなた本当はいかがわしいカルトでしょう。

瞑想録(その4)

宣教師: ああ、何と言う嘆かわしい時代だ。イエス様はあなたの罪を背負って十字架の死を遂げました。

私: 罪って、別に警察のご厄介になっていないし十字架なんて知らないし。

宣教師: 誰でも罪びとです。イエス様はあざけられながら十字架につかれました。

私: 罪々ってうるさいなあ。人為的な誘導尋問はいい加減にしてよ。

宣教師: なら聞きますが、あなたは皆があざける中で一人だけイエス様の味方ができますか？

私: うう、そう言うのは普通しないよね。小保方さんだってぼろくそだし。

宣教師: それがあなたの罪です。罪です。罪です。悔い改めなさい。そうすれば天国でイエス様と共に居る権利が得られます。タダですよ。

私: 私はアニミズムの人間なので、死んだら魂がお山に帰るだけです。

宣教師: お寺に禅に行くのではないのですか。宗教混合は異端です。

私: 日本人なら誰だって神社も寺も行くしヨガもやるよ。

宣教師: ヨガ…。ヨガはサタンからのものです。

私: 頭が変なんじゃない。ヨガがサンタなの？

宣教師: サンタじゃなくてサタンです。主に立ち返ってよみがえりの命を頂きましょう。

私: よがえり(世帰り)ですか。ヨガの世帰り良い気分♪。

宣教師: よみがえりです。望めば何でも叶います。「求めよ、そうすれば与えられる」と聖書に書いてありますよ。聖書には全てがあるのです。

私: 禅で人格を磨くのですよ。でも人格が高すぎてもこの世では偉くなれないしなあ。

宣教師: オオ、それも聖書に既に書かれています。「この世の子らは光の子らよりも利口である」とあります。

私: まあ、足りることを知らないと…。

宣教師: オオ、それも聖書に既に書かれています。「心の貧しい者は幸いだ」とあります。

私: いや私は万物に神が宿っているという立場ですから。あなたは四季の美しさを知らない。

宣教師: オオ、それも聖書に既に書かれています。「神様は名もない野の花さえ飾って下さる」とあります。

私: もう色々言い訳をしたくないな。私は大和魂の持ち主ですから。

宣教師: オオ、それも聖書に既に書かれています。イエス様は裁判官のピラトの前で言い訳をしませんでした。イエス様に全てを預けなさい。

私: オオ、それはお釈迦さまもおっしゃいました。他力本願ですよ。仏典に書いてあります。さあどうだ。

宣教師: そんなことより聖書です。聖書以外に真実はありません。

私: もう聖書、聖書ってもううるさいな。我田引水も良い所じゃないか。

瞑想録(その4)

宣教師:オオ、我田引水、それも聖書に書かれています。天の主は、救いのために異邦人のガマリエルさえも利用した・・・ことにしました。

私:なんだ、このおっさん、実は分かっているのか。(小話は以上)

小話は以上ですが、キリスト教が如何に我田引水で屁理屈の押し付けかを象徴的に描きました。こういう話を書くと大抵反論が寄せられます。反論はキリスト教徒の側からと、非信徒の一般大衆からと2種類あります。

キリスト教徒の側からは「失敬で不謹慎だ」とか「全然分かっていない」とか「聖書のどこにそんなことが書いてあるのか」とか、まあ頭がそっちに行っちゃっているので、所詮話がかみ合いません。

意外なのは素直な日本人からの反論です。日本人の多くはキリスト教に対して素朴に良いイメージを持っていて、一度位話を聞いてみたいと本気で思っているようです。そう言う人には上記のような展開は意外に見えるようです。

たしかにキリスト教の宣教師にはたまに、変に親切な人が居ます。英語もただで教えてくれて、優しい雰囲気です。彼らは外向きには確かに広告塔として素晴らしい働きをしています。こと業界内部の政治に対する発言力は全くありません。それに特に日本のキリスト教は、社会派と呼ばれる極左の、他に就職先がない学生運動崩れのプロ市民集団が実権を握っています。

そんな実在の、〇牧師の話をしましょう。彼はバリバリの活動家の韓国大好き人間で、祝祷(しゅくとう)も韓国語でやるほどでした。み言葉よりもヤスクニやゲンパツやイアンの家で、基地反対運動の常連でした。そんな彼が、いつのまにか聞こえなくなって、忘れられてしばらく経ちました。そしてある日、政治色の全くない地域住民の集まりにひょっこりとやって来て、紹興酒をしこたま飲んで世間話をして気持ち良く帰ったそうです。そこにはかつてのこの人の面影は全く無くて温和になり、まるで別人のようだったとのこと。

おめでとう、〇元牧師。やっと救われて生まれ変わったのだね。

24、心象の客観性(自己弁明)

東山魁夷、奥村十牛、平山郁夫、いずれも故人だが日本を代表する画家で、かつ衰えを見せずに生涯現役を貫いた人々だ。例えば魁夷の絵、森林の幽玄さなど写真で

瞑想録(その4)

撮ったかのように精密だが、彼の究極の目標は精密な実写だったのであろうか。もしあれが単に精密だけであつたなら、我々はご苦労さんとは思つかもしれないが感動はしないだろう。我々が感動するのは、彼の絵面(えづら)の奥にある幽玄さ、彼の心象そのものであつた所の幽玄美の、極めて神秘的な心象そのものである。だから絵や美術品を通してその奥にある心象を見破れない者は、人工知能と同じでバカ正直すぎて魂の無い、不器用すぎて話にならない最低の人間だ。ここでしかも、ほとんどの人がほぼ同じ心象を得るところが重要である。

奥に潜んだ心象を読み取ることの本質さは、絵画等の美術工芸品に限らない。文学はもとより、哲学に係る古典的名著に於いても、それらはほとんどが人文科学に属する成果であつて、かつ極めて難解であるのが通例だが、なぜ難解なのかと言うその理由の1つに、字面からその奥にある、著者が真に言いたかつたことを見出す難しさ、つまり共感して心象を読み取る行為の難しさがある。著者が如何に大先生であっても、与えられた言語体系内で表現するしか方法がないので、結局アナログ的な気付きをデジタルな近似で表現するしかない。

そのやむを得ない近似からその奥にある本心や心象を読み取る行為、それはあたかも干物を元の生きた魚に戻すような、情報理論的には不可能が証明されているような行為なのだが、それが必要だしかつ知恵のある人には可能で、しかもそれら知恵のある人の心象は、各人の脳細胞内の超主観的再現であるにもかかわらず、あたかも客観的な物理現象であるかのように互いに共通している。この主観と客観の同時存在は、だからこそ人の防衛保存本能は有効に働くのだが、不思議である。

以上の説明で見えてくるように、人の理解行為とは即ち心象に至ることであり、かつその心象とは超主観でもなければ超客観でもない、先日の構造主義の記事に則すれば実存主義でも構造主義でもなく、まあポスト構造主義に一番近い、文脈全体を通して主観で客観的に捉えるようなものなのだ。禅の用語に「心調、息調、身調」と言って、良い瞑想に入るには心身の他に第3の「息」も整える必要があるが、この息こそが超主観でも超客観でもない心象に近いとも言えそうだ。

この心象は、先に「情報理論では不可能が証明されている」と指摘したように、「遊び」や「ファンタジー」や「余裕」と言った面があるので、がんじがらめの科学主義の手続きからは出てくる余裕や隙間がない種類の物だ。小松左京の「日本沈没」では、ほとんど科学の体裁を取りながらも、一点、プレート境界が日本列島直下にあると言う虚構を入れることにより、SFと言うファンタジーになることができた。SFの面白い所は、科学的厳密さを、通常の小説のように捨てずに、むしろ利用して乗っかっているところだ。

瞑想録(その4)

赤瀬川源平さん風に言えば「超科学」なのである。科学にはファンタジーはないが超科学にはトマソンと同様にファンタジーの余地がある。

私の師である山本七平先生は以上の視点からは、科学の中にファンタジーを入れ込もうとしたパイオニアだったと位置づけられる。先生は世界標準(主としてヘブライ学)を鏡に日本人の摩訶不思議を論じ、他方私は逆に、日本人を鏡にして世界の常識の摩訶不思議を論じては居るが、共通しているのは、科学と言う硬直した手続きを選ばずに、そこに敢えて心象と言う「超」を入れようとしたことだと思う。

山本先生の場合、あくまでも学問であると主張した、少なくともそのような体裁であったために反発もあり、「山本学は誤謬の塊」などと悪口を言われた。だが山本先生がやりたかったことは、例えば「ユダヤ人は自己の安全保障のためにホテル住まいをする」と言った言説が典型的なのだが、デフォルメのファンタジーを入れて、特徴抽出的で象徴的な論証法を取ったことである。ただデフォルメやファンタジーの時点で、厳密には科学から離れている。

不肖私の場合も、説得の手段にやはりファンタジーを用いて、それにより楽しい瞑想とした上で、ファンタジーによって生じた余次元の広野に「好き勝手な絵」を描いているが、山本先生との違いは、始めから「科学でない」と居直って宣言しているところだ。原点が連続体と蓋然論理なので、当然に科学ではありえないが。この意味で、私に山本先生と同じ批判をするとしたらそれは失当である。一旦科学と縁や手を切ると非情に気楽だし、アイデアが続々と沸いてくるが、では大衆娯楽や江戸文学のように荒唐無稽かと言うと、ファンタジー以外のところはかなり科学的な姿をしている。つまりSFと同じような科学の利用の仕方をしている。そしてその成果を瞑想から得ていると言うことは、内容が心象だということでもある。私はSFでなくHM(Hypothesis Meditation)と呼んで欲しいと思っている。

俗な例を挙げよう。新作ラーメンの味が「分かる」と言うこと、これは用いた材料を推測できるという意味でなくて、「どうしてこの味を出したかったのか、その店主の心意気が分かる」と言うことではないか。そしてその心意気が分かった時に心の交流があって互いに感動するに至る。ここで言う心意気とは即ち心象である。

SF的心象の蓋然論、まあポスト構造主義自体は科学だがこれに近い所、それが私にとって一番居心地が良い所であって、自分が長い間探して見つけた境地を敢えて明文化したものだ。SFもその初期には「紛らわしいウソつき」呼ばわりされたものの、今ではそれなりの立ち位置を得たように、蓋然論(絶対ではないが結構当たると言う

瞑想録(その4)

論理)も、いずれ(多分私の死後)その立ち位置を得るのではないかと期待している。心象とは心の風景のことであり、妄想と似た能力を用いるが、人の心の働き、「理解→感動→想像→決断」と言う一連の行為の根幹を成している。しかも心象とは言葉通り主観であるものの、蓋然的に皆が同様の心象を得ると言う意味で客観なのだ。

客観を主観でやる心象、心の情景、これは人の脳の働きの形而上の理解に於いて決定的だと思われる。

2015. 01. 23